川柳の雑誌

麻生路郎☆主宰

Pensoj flugas trans la land-limon

The Senryu Zasshi

No. 292

昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可
昭和廿六年九月一日発行（毎月一回一日発行）
創刊大正十三年・通巻二百九十二号

九月号

九月号目次

題　字……………麻生　路郎
表　紙（秋の風）……由比種三郎
講和と川柳……………福田山雨楼…（四）
中学一年生の川柳……丸山弓削平…（一四）
武蔵坊弁慶（下）……冨士野鞍馬…（一八）
忘れればこそ…………安川久留美…（一五）
新川柳評釋百句
昭和の作品から（5）……麻生　路郎…（一〇）
英　訳　川　柳……石田喜宝亭…（一三）
川柳日光見物…………川村　好郎…（一三）
柳碧見つけたり………直原七面山…（一九）
川　柳　漫　釈………小畑自由朗…（一三）
蚊　　　　　帳………麻生　路郎…（二）
川柳から見た
産児制限と避姙薬……市場没食子…（二〇）
不朽洞喫煙室………………………（二七）
豆秋・鮎美・一笑
飛　燕　往　来………………………（一六）
★
不　朽　洞　句　帖……麻生　路郎…（五）
近　作　柳　欄……麻生路郎選…（一四）
川　柳　塔……麻生路郎選…（七）
同　舟　近　詠……諸　　家…（六）
一路集「綱　柳」浜田久米雄選
　　　「氷　楽」北川　春巣選（二一）
各　地　柳　壇………………………（二三）
動　　　　　静………………………（二六）
不朽洞会から…………………………（二六）
川柳不朽洞会名簿……………………（二六）
編　輯　室　に　て……………………（二八）

蚊帳

私の家では私だけが蚊帳を釣つて、同室の葭乃や一歩は蚊帳の外で寝ている。一寸考えると、私がいかにも横暴で封建性のようであるが、こんなところに却つて私の家の自由主義が見られるのである。私は蚊が一匹いても眠むれないが、老妻は神経が太いのか、蚊がブン〳〵うなつても平氣で眠むるのである。私は蚊帳を釣ると安心して眠むるが、老妻は蚊帳を釣ると、うつとうしくて眠むれないのである。一歩も老妻の遺髮をついだのか、蚊帳を釣らぬ方がエヽと云つて、これも蚊帳の外に寝ている。従つて私だけが大きな蚊帳を細く長く私の寝床の形に釣つてもらつて、その中えもぐり込むことにしているのである。

私の少年時代、大阪がまだ東西南北の四区制の頃には、船場のド眞ン中に住んでいたから、一匹の蚊もいなかつたので、蚊帳なんか釣らなかつたが、その後アチコチへ宿替をして蚊帳の味を知つたのである。

青い蚊帳を釣ると、海の底に寝ているような平靜な氣持ちがするし、白い蚊帳を釣ると清潔なすが〳〵しい感じがして、スヤ〳〵と眠りに落ちることが出來て、蚊の存在なんか忘れてしまうものである。今から三十年ほど前に鳴尾に引つ越したところが涼しい家で、戸を明け放しておくと、蚊帳が風に吹かれて、下部が一尺も一尺五寸もあいて、蚊帳の用をなさなかつたのを覚えている。しかし、そんなに風があると蚊帳の裾があいていても蚊が這入らないで、蚊帳は單に安眠の具に過ぎなかつたようである。

老妻に云わせると、今の家でも昨年は少しはいたが、今年は一匹もいないですよと云うが、私の耳にはたしかに蚊のささやきが聞えるのである。

高師の浜の貴志子さんの家へ泊まつた時、眞ッ新ラかと思われる白い麻の大きな蚊帳を釣つてくれられたので、ニッタリとした氣持ちで安眠したものであるが、色のあせた破れ蚊帳くらい貧乏くさいものもないと思う。三重縣の一の宮に疎開した時には破れ蚊帳で繕うひまのない間は私だけ、蚊帳を額の上だけかむつて寝て、兵隊の蚊帳を偲んだものである。

私の家のように、單に蚊をふせぐための、つくろいさがした蚊帳に寝ていると、風通しが悪るいので、随分蒸し暑いものである。夜の明けるのを待ちかねて蚊帳の片側だけを外づして、外部の戸を少しあけて朝の風を身にうけることにしているが、この時ばかりは蚊帳を釣らずに、スヤ〳〵と眠つている老妻の氣持が判るような氣がする。

（路郎）

不朽洞にて——路郎

川柳を研究したい人にも
指導する人にも好適の書

好評嘖々

麻生路郎著
水武書房版

本書は著者が多年のウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新指導書としては唯一無二のものである。

「川柳とはどんなものか」から説き起して収むるところ三十七講、平明で親切で、初心者は本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを会得することが出來る。多年川柳してゐる人たちにとつても又好参考書である。敢て一読を薦む。

B6版二一二頁
定價　一〇〇圓
送費　金十二円

取次御注文は
大阪市住吉局區内万代西五丁目二九番地
川柳雑誌社
振替口座大阪七五〇五〇

御贈答に
お手軽で御便利な
近鉄の商品券
100円より各種
両店とも　1階
近鉄
大　阪

ENGLISH VERSION OF THE SENRYU

By Kihotei Ishida

Deep I think of my kiddy
That they would just like me grow
And not to ressemble like.
Asō jiro

Oreni niyo
oreni niruna to
ko o omoi.

Poured I 'sake' in cup
That I plea him to dry cheerfully.
And likewise to abstain it up.
Asō yoshino

Nonde hoshi
yametc mo hoshii
sake o tsugi.

'Twas an ancient talk that
Our life would become much better
Should so harder we work.
Suzaki tōshu

MUkashi mukashi
kasegeba rakuni
narishi toka.

That's also the thing to happen
the bell so unexpectedly to lull
when one on his journey is.
Asō jirō

Dashinukeni
kanega narunomo
tabi no koto.

As if to say 'I' m alive'
Dangling caterpillar made a little stretch
Into space of the universe.
Obata jiyūrō

Ikitorimasuto
imomushi
nobite mise.

譯者紹介　石田喜宝亭氏は海外各地に多年在住
引揚後進駐軍通訳　目下英語講師
川柳雑誌社・弓創支部同人

講和と川柳

福田山雨楼

川柳は盛んになる

國民待望の講和は來る九月サンフランシスコで條約が結ばれることになつた。その曉は日本も独立國家として民主主義陣営の世界に仲間入りができるわけである。尤も共産主義陣営との対立が緩和の方向に進んでいない今日、再軍備の問題とか貿易通商、移民の問題等、わが國の立場は非常に困難なるものがあることは想像に難くないのであるが、自由にして平和な社会、文化國家としての骨格は、國民の理想として新憲法に盛上げられたとおり今後益々推進されるに違いない。

自由、平和、文化を愛好し尊重する國民感情の中で、あらゆる藝術が隆盛に赴くことも亦自明の理であつて、音樂、美術、映画、文学の交流、スポーツ競技、ユネスコ活動の如きは、逸早く國境と民族とを超越して興隆を見つつあることは隠れもなき事実である。國内的にも戰後自由思想の発展と共に、藝術のあらゆる分野において復興と革新と進歩とが著しく目立つて來た。

川柳も御多分に洩れず短詩文学のさきがけをなしぼうはいとして各地に蜂起し、内地は元より遠く布哇、北米の地に至るまで数多くの柳友を迎えるの盛況を呈している。斯うした趨勢が講和を轉機とし今後一段の伸展を見せるであろうことは、あながちわれらの希望的観測に止まるものではないと思う。即ち、講和を契機として川柳発展の立地條件がプラスとなるからである。川柳の成長と社会の受容とがマッチするからである。言論の自由が文字通り、憲法の額面通り通用し、大衆の声、世論が実践的に尊重されるからである。このような沃土に根をおろす限り川柳はその本來のスピリットを発揮して、益々健全なしかも尖鋭な育成を遂げることは最早必然でなくてはならぬ。

新聞は社会の木鐸として発達し、今や國民の精神的食糧として不可缺の存在であるが、川柳も亦國民感情を知り巷間俗耳に触れ野の遺賢の声を聞く上において、ビタミンの働きを無視することはできない。川柳は眞実の意味における國民詩である。爲政者も学者も実業家も勤労大衆も、この國民詩を読み或は作句して講和締結後の自立再建に向つて、心からなる協力を推進すべきである。川柳を通じてお互いの俗腸をさらけ出し、より美しい社会の秩序と正義とを確立すべく提携すべきである。

英國人はユーモアを解するが故に強い。日本人は川柳を理解し愛好することに依つて、益々強く正しくならなければならない。

川柳の正しい認識は平和から

わが川柳雑誌社では川柳の社会化運動のために、路郎主幹自ら陣頭に立ち同志と共に血戰力闘正に三十年に及ばんとしている。その間の功績は手前味噌になるからあえて述べないが、その苦闘は生やさしいものではなかつた。ところが、昭和初年から漸を追つて日本は軍國主義、帝國主義的野望を露呈するに至り、東洋平和の美名の下に軍備の拡張を行つて來た。一方弾圧的な憲兵、特高警察のGメンは全神経を尖がらせて、自由思想撲滅のため國民の腹背に迫つた。こう云う狀勢にあつては川柳の社会化運動も仲々容易なことではなかつた。武装平和のイデオロギーはあくまで富國強兵の一枚看板であつて、川柳文学もこの埒から外れることを許されなかつた。仕舞には國民精神総動員のお先棒をかついで踊らねばならなかつた。これは独り川柳のみに限つた現象ではなく、藝術の全分野に亘つて強制された命令であつたことは今更ら云う迄もない。

講和締結に伴う平和の來復は以上のような藝術上の悪夢から醒め、藝術本然の姿、あり方に引き戻すことができるようになる筈である。勿論全面講和ではなさそうであるから、全面平和は期し難いが藝術の開花がこれにより研を競うのもそう違くではあるまい。

「戰争は、人間の心の中ではじまるものであるから、人間の心の中で、平和の防衛が建設されなければならない」これはユネスコ憲章前文の有名な言葉であるが、この運動の精神は、眞に平和を愛し眞に文化を尊ぶものがあらゆる文化面で有無相通じつつ、エゴイズムを捨てて誠実に世界のさまざまの文化を一つの世界文化に纒め上げることに協力するにある、と云われている。世界は今や急ピッチをあげこの線に沿つて走りつつあるのである。局地的には紛争が絶えず起伏しているようであるが、何れも譲歩と妥協と誠実を披瀝し合つて解決に努めている。

新憲法による日本國の平和宣言はユネスコの理念と完全に一致しており、世界平和建設の基礎事業に本質的参加を約束したものである。数百万の尊きぎせいと國土荒廃と云う惨たる敗戰に、戰争が人類の破滅を來すものであることを自覚し人間性の深底から出る堅い決意に基くものである以上、平和への願望は人類永遠の理想でなくてはならぬ。このように考えて來ると今次の講和は、血涙を以て贖われ國土を賭して獲得した講和であると云う以上に、尊厳且つ絶対の講和であることが理解されるのである。

嚴且つ絶対の講和即平和の到來に対処して、われわれ日本人の爲すべき文化活動は、縦に深く堀下げた根強い建設的のものであると同時に、横に廣くつながりを持つ即ち國民大衆の理解と支持とに依る情熱的、永続的なものでなくてはならぬ。

こうした基盤の上に立ち、このような強力なバックボーンの下にあつて、わが國民詩川柳は初めてその本然の姿を発揮し、社会の正しい認識が期待されるのである。講和は川柳にとつても最も好もしい機会と時代とをもたらすものである。

新人の輩出はこれから

明治維新は青年の手で行われたものだと云われる。大正から昭和初期に亘る文化のレベルアップも向学心に燃える青年の情熱に負うところが多かつた。然るに日本が帝國主義國家に傾いてからは、職業軍人を志望する青年が多くなり秀才は陸海軍の士官学校に集ると云う風であつた。また徴兵入営の数も段々多くなつて行つた。斯くして日本の破局は一歩々々深淵に臨んだのである。

終戦後の青年は余りに無慙な幻滅の悲哀と、一般の虚脱狀態とに引きづられて氣力さえ失つたかの感があつたが、その後漸く立直り今講和を前にして純眞氣鋭、再出発を期し國家の前途をその双肩に担わんとする意氣に燃えつつあるのである。

哲学者天野貞祐氏は昭和二十三年にこう云われた。即ち「幸福の希求は人間性の自然である。若き諸君においてことに然りというべきである。けれどもわたくし達の幸福は人間存在にふさわしい幸福でなければならぬ。それは單なる口腹衣食の足ることは固より肝要であるが、しかし單にそれに止まらずして精神的、身体的存在たる人間にふさわしい要求の全人的満足でなければならぬ。豚の満足よりはソクラテスの苦難がえらばるべきは当然である。國家の創造建設という高貴な課題はその苦難のうちに幸福を包藏するはずである。わたくし達が一致協力この高貴な課題のために奮励努力することの必要今日より急なるはなしと云うべきである」と、しかし今日の青年は日本の復興と再建とを成し遂げるべく、正義と勇氣と情熱の持主である。少くとも持主となるよう努力しているのである。

評論家古谷綱武氏は昭和二十五年にこう云われた。即ち「文学は人間の精神にめざめをあたえ、そのめざめをたえず刺戟しつづけるものである。読むことは、書くことは、そして觀察し、思索し、反省し、探求することは、人間のなかに眠つている人間の一番貴い能力を、開発し、育成し、増進して、本当の意味での教養人を作上げてゆくための、最も有力な道のひとつである」と、そして今日の青年は人生と藝術を愛好し、文学を愛読する創造的、革新的精神の持主である。少くともそう云う青年の数が次第に増加しつつあるのである。

川柳を愛好する青年層は講和と共に漸増を示すであろうことは、最近柳壇の動向がよくこれを物語つている。即ち青年作家同盟ができたり、新人の投句者が増え、療養所入所患者の入選者が目立つて來ている。昨年來自分は某工場の文藝作品コンクールの川柳選を担当しているが、その投句者は新人が大多数である。大学の入学試験問題や進学適性テストの中にも川柳が一再ならず取上げられている。このようにして川柳に関心を持ち、川柳を愛好する新人は加速度的な増加を見つつあるのである。新人の輩出はこれからと云う感が愈々深い。

川柳の海外進出

現在でも布哇、北米には数個の川柳吟社があり、在外邦人の精進振りは目ざましいのであるが、講和と共に國際間の文化交流が盛んになれば、英訳、佛訳、独訳、華訳等々の飜訳川柳が海外に進出することも想像されるのである。由來飜訳川柳に対する意見は悲觀的なものが多く、到底簡潔な日本語の妙味ある調律語感は訳詩できるものではないと、乘氣になるものは甚だ少く、佐保蘭兄が飜訳川柳研究会を組織して奮闘された外は、二三の英訳川柳單行本が出ただけで鳴りをひそめた形であつた。しかし路郎先生はさすがに卓見を示していられる（川柳雜誌昭和八年九、十月号五七五の飜訳参照）。その中で先生はこう述べていられる。即ち「私は杉村楚人冠氏ほどの年令にして、しかもあれだけの博学と才能を有しながら、なほ且つ飜訳の絶対不可能論を称へられつつある熱と眞面目さとには深く敬意を表するものであるが、ある種の譲歩を敢てするならば、飜訳によつて古今東西の人間が清交し得るよろこびを思ふ時、飜訳も又棄て難いものであることを思はされる」先生は更に笠原路生博士の川柳独逸訳に言及され、「私の句から訳せさうなものを選んで四五十も訳される筈である。これは私ひとりのよろこびではなく、川柳を海外に紹介する

不朽洞句帖

麻生路郎

斜陽族佛壇までが小さくなり
足の裏踏むサービスを孫にさせ
おしやべりはきらいわが妻ならずとも
電氣ゴテ片づけ帰り待つばかり
追放解除もとの一徹者になり
云い出したからには女強しとも強し
老らくの恋まだサンづけで呼んでいる
割箸を割つてもらつてやに下り

意味に於て非常な功績であることを思はされる。私は衷永くその完成を期待してゐよう」とのべられた。このように川柳の飜訳と云うことも適当な訳者、用意と熱意の三拍子が揃えば、必ずしも至難事ではないかと思われる。

一方短歌界でも海外進出が話題になつている。歌人五島茂氏は昭和二十二年こう云つている。即ち「短歌を文学の廣場に出すと云うのが現に起りつつある新運動の合言葉だが、それが現代日本文学の廣場に出すといふに止まつてはならない。世界の文学の廣場に出し詩文学としての世界水準を短歌に競はしめるのでなくてはならない。短歌は独特の味のものだから外國人には理解出來ぬなどと云ふ痴呆の言をやめよ。閉ぢた世界の言葉や技巧だけの味にたよる時代は過ぎている」仲々強い鼻息である。

兎に角ペンクラブの活動が物語るように、世界文学の交流は必至である。講和はそれに一層の拍車をかけるであろう。最近学習院大学講師英人ブライス氏に依り、英文川柳紹介書が出版されたと聞くが、柳壇は一層よき訳者を得て、双互協力の上にこの文化事業を推進しなくてはならない。

川柳家は時代に目覚めよ

講和を前にして川柳の前途について自分は余りに希望的観測を述べたようである。しかし手離しの楽観をするものではない。希望と期待が大きいだけ今後川柳家に課せられた責任と重荷を眞剣に自覚しなければならぬと思う。

それには何と云つても、いのちある句の創作にはげむことだ。切札の句を生むことだ。多作必ずしも排斥すべきではないが乱作におちいり易い。それよりも心血をそゝいだ一句の尊いことを自覚し、作者の体臭が感じられるような生きた句を創作しなければならぬ。路郎先生の名句「俺に似よ」の発表されたのは、鳴尾時代先生のお宅で開かれた柳談会の席上である。徒らにお祭騒ぎを止めて、静かに労作をいつくしむ雰囲氣をつくることが必要である。また嚴しい現実に鋭く対決してお互の生活を凝視することも、よい作品を生む一つの鍵である。更に優れた作品を取上げこれを縦横に鑑賞する仕事も忘れてはならない。大会などで高点を争う競技が行われるが、これは賞品目当てのさもしい根性が出るからいけない。それよりも大会当日の最も優れた作品を選び出して、これを表彰すると云つた方法を執る方が遙かに意義がある。通巻天位を定めるにはいろいろの困難が伴うが、その困難を克服する過程において川柳は本当の成長を遂げるのである。

次に時代は目まぐるしく急轉回をなしつつあるのだから、これに対應して川柳家はおのがじし教養を身につけ、強く正しく生きぬくことである。これは川柳を文学する以前の問題であるが、根本且つ緊要である。貧富とか職業、階層などは問題ではなく、川柳家がその立脚する立場において、如何に誠実であり親切と愛情に滿ちているかと云う問題である。

路郎先生は人間滲冶の詩と云うことを說かれているが究極はそこに帰するのである。何も句に勧善懲悪を盛つたり教訓めいた着想を云々するのではない。リアルを通じ俗に浸り乍ら、よくおかしみの詩情をとらえ、しかもヒウマニズムの香り高い作品を生み出す心、そこに唯一絶対の関心が寄せられなくてはならぬ。

講和のよろこびは今や眼の前にある。同時に新たなる苦しみの時代がその日から訪れることをわれわれは牢記しよう。

同舟近詠

金沢　安川　久留美

何のそのわれ〳〵如き誕生日
平凡に生れ平凡に珠数にぎる
右砂糖左は塩の中に生く

松山　前田　伍健

恋はつらし彼甘党に轉向し
浮浪兒の夢もよい兒の夢も母
映るもの皆くね〳〵に川涼し
しよぼ〳〵するなと酎の置きつぎ

姫路　池沢　樂居

お夏清十郎比翼塚三百年祭
お守も出そうな名所の比翼塚
三百年目蓮の半座も廣かろう

東京　富士野　鞍馬

銀行は官廳よりも待たすとこ
名刺には肩書のないゝ社長
格下げをして職につく五十過ぎ

大阪　橋本　綠雨

信心のない佛壇はほこりのみ
叱る氣で云えば笑顔をみせる也

＝西日本川柳大会の豫告＝

川雜美作支部では、本年も旺んな西日本川柳大会を開催する由で既にその懇談会を開き各地からの出馬を期待している。

日定は九月廿三日の午前十時からだそうだ。初代川柳の忌日だし、日曜だし、翌日が秋分の日の祭日に当るので、会社なども休みだし相当に賑うだらう。弓削駅前の路郎句碑を見物かたゝ〳〵是非川柳町弓削の空氣を呼吸してもらいたい。私も是非出かけるつもりでもう〳〵兼題〳〵を回答しておいた。プロはまだ作製中らしいので詳細を報ずることが出來ないが、今から出かける心づもりにしておいていただきたい。何れ案内も行くであろうが、直接案内の來ない場合でも遠慮なく社へ問合せていただけばお知らせする。

（路郎）

川柳塔

アベックの爲公園をまた拡げ　大阪市　武部香林
浴衣掛け科学の藍のものたらず
人の道踏んで場末に生き残り
玉の子と生れ女給になり下り
二号です腕輪耳輪に首飾り
人間の匂ひを知つた人の渦
値上しただけで足らぬと停電す　平塚市　木村孤浪
財閥をちと匂はしたマーク也
親死んでから貧屋は流行り出し
泣かす子は廿何年育てた子
組んだ腕無念無想に又させず
不孝な子今夜も思ふまいとさせ
なすの色去つたあの子が好きだつけ
二本目が少し残つて父の老ひ
日本の田植絵にして赤だすき　横浜市　福田山雨楼
辛酸は嘗めたが腹はまだできず
腕豆とジヤガイモこれは妻の作
幸三が義雄に兜さつと脱ぎ
同姓の女中殺しが社長とは　兵庫縣　戸倉普天
簑笠で画中の人となるもよし
さすが名門田植姿に品があり
ホノルル　内藤草一郎
どうせそうでしようと鬢をかき上げる
斯うなればゴシツプ通りと氣が変り
思ふつぼ御世話になると折れて来る
坊つちやんらしいとこがいゝわと照れさせる　尼崎市　水谷鮎美
しらさぎより
おもかげを追へば夕暮ぶどう色
しまひ風呂善人の首一つ浮き　京都市　村松夢裡
眼にものをみせてやつたよ蚊を殺し
言い様のない寂寥ぞ妻の留守
恋愛至上なに六十の遅かろふ
もみくちやにされてもうれしすきな人　大阪府　西尾栞
應接間の金魚逆立してくれる
弱り目にたゝり目といふ詐欺に遭ひ
スタンドの出物があつた妓の電話
アンタハン何ヘンと女給の訊ねやう　大牟田　高田抱逸
嫁きおくれ夢に何度も嫁にゆき　佐賀縣　松野えいを
夏痩せの肩怒らせて譲らざる
感激のない手を振つて別れたる
貰ひ水氣兼のポンプ音高く　大阪市　市場沒食子
ストリツプお臍はお目に入れ申し
ゴム印よお前も滅つてもう首か
紫陽花をほめる夫人も宿の下駄
藥代と思へば安い闇の米
求人は二名ひしめくこの列よ　名古屋　吉田水車
夏時刻あつと言う間に寝る時刻
流行の激しさに女性耐えんとす
何処迄も女は歩るく事が好き　大阪市　須崎豆秋
平家蟹公達どもが夢の跡　屋島
一葉になれずストリツプにもなれず　大阪市　竹内潮花
弟子と言ふ哀れは日傘もたされて
犯されに行くとは知らぬ化粧して　大阪市　北川春巣
フエミニスト又失恋をしてしまい
アベックの目にアベックのとんぼ行く　大阪へ帰る（二句）
観光バスの中は大阪弁でなし
大阪の暑さ目に見る子の汗ぼ　奈良縣　尾崎方正
産み月へ蛙の腹をふと想ひ
藥瓶ごちや〳〵並べ着う居る
避姙藥潜つた末子に養はれ
次で降りますのやと軽く断られ
藥包紙へチョン〳〵〳〵と藥剤師
窓ぎわの女の腕は蛸に似て　下関市　櫻川不水
草疲れてうつかりお尻抑え兼ね
廣告じや金のなる木に花が咲き　大阪市　菊沢小松園
根性の曲つたなりに金が出來
寝た振りでみんな聞いてる子の理窟
金のある阿房へ嫁いで行きました
夏休み家は鼎の沸く如し　大阪市　木下幽玉
ぼんぼんのプライド値切りもせず帰り
血を吐いているのにラジオは打ちました〳〵

たんつぼもしびんも親しいものゝうち
つぎはぎの蚊帳で大望抱いてねる
とゆが無いので雨が奏でたドレミハソ
うつたへる目と目がこともなく別れ
もう一人のぼくを殺して子と遊び
そんな夢捨てなはれとも妻云はす
せめて句にまぎらす心君知るや
せめてもの奢り子供とのるタクシー
配電局電氣時計は止まつてた
うかつにも闇屋に席を譲りけり
妻の留守飯の仕度にかゝりはて
卒業の一ト月で早よい娘
未亡人幼兒の声の山羊を飼ひ
援護受く女パーマをかけて居り
儲からぬ肩書またも一つ增え
添寝する母の体臭から寝付き
おかあしな人ねととても愛して居
婿迎えたらしい門標見て通り
私邸へも手ぶらで訪うた若さなり
キツス・シーンが終つて足を組み替える
自由型さすがのプール狭くなり
氣前よく出した千円皺だらけ
あすはあす氣前で財布空にする
默々として働いた父のしわ
義理堅き友は明治の生れにて
当然の如く三男無心言ふ
人間の種も賣るといふアプレ
晩年は易者に保証されたけど
相傘の袖濡れさせぬ肩を抱き
バーの灯で魔女といはれる眉を引く
空くぢを破つてしもてホツとする
卒直にものが云へない恋かしら
病みつけば一パイの粥ももてあまし
病人の虚勢枕辺の金時計
寝ころべば草はなびいた倒れやう
梅雨空に堺、長崎市史と寝る
鉛筆を握つたまんま眠つてた
再婚はうつかり出來ぬアナタハン
社長室まだ帰へろうとせぬ紅葉傘
キツスして良いかと男純情な
邪恋なを続けん爲めの山を賣り
氣拙さを宿の女中に助けられ
行末は知らす女と旅にゐる
私生活に触れず二人は逢い続け
恋成つて女浪費をたしなめる
八重ちやんと呼ばれ三十五にもなり
薫風一陣ここらで一服する土建屋
鳴るは口笛山脈近きセーラ群
銀行の廣告に先づ妻は賛成した
その孫は遂に家紋を忘れたり
君に雪月花俺に運鈍根かいな
接吻の一歩手前アレ時鳥が啼いて
氷だけ溶けてまだ〳〵夜が明けず
お経にはさすがローマ字書いてなし
だましてもやつぱり予報聞いてくれ
母（十句）
僞はりへ母の怒りのはげしき夜
母親に読む暇もなし主婦の友
僕の母私の母の綴り方
月給日母のお好きなものを訊く
平常の通りで母の日も暮れる
母の日を母は笑つて飯を炊く
実印を押したを母の不安がり
留守番の方を母親希望する
上役へ母も小さくなつて会ひ
拾円をこまかいものと母も馴れ
有り余る石油が元でイラン揉め
子の親になつても梯子酒やます
世渡りの不味さ小額預金帳
農繁期恋をさゝやく暇はあり
婦人会講師の服を批判する
金のないのが銀行の前に住み
合槌を打つて保身の術とする
追放解除
氣の抜けたころ風船の糸を切り
同じなら呑んで足らない方に極め
死の抗議小つちやい波紋だけだつた
泣く様な声で結局借り出せず

奈良県　飯降白香
山口県　長野井蛙
大阪市　西森花村
大阪市　福田妄夢
大阪市　水谷竹荘
兵庫県　小西無鬼
尼崎市　小林文月
社会福祉協会の誕生
青森県　山根白星
大阪市　渡辺孫拙
大阪市　冨岡淡舟
大阪市　土田春柳
大阪府　友淵貴山
大阪市　松江梅里
大阪市　竹田芦穂
岡山県　直原七面山
宇部市　上林粗影
兵庫県　家沢薺花
岡山市　藤本満年
熊本県　西口如川
鳥取市　河村日滿子

隔屋へ間借りにあらぬ身を伸ばし
年故の腰の痛さを誇張する
岡山縣　福島鉄兒

未練なきにあらねど貢ぐ金が切れ
食うだけが出來す少さく居る二階
大正の生れかそうかとあしらはれ
兵庫縣　榎南夏六

嫌ぢやありませんかよそゆきの声出して
老境を雲に慰められて日日
ボールペン義理人情の字ではなし
覚悟した顔が出て來る社長室
岡山縣　高山朗笑

大きい尻小さい尻田植なり
植え終えてめつきり夏の感じなり
言訳に弟連れた螢取り
藏切さ今日が限りのペンを取り
柿の花咳く如く落ちにけり
臨終へポチリ朝顔咲き始め
化粧見て帰つた様な見合なり
岡山縣　服部十九平

こつそりと袂の底で紙幣をよみ
引揚者らしい男で弁がたち
同情が迷惑そうな未亡人
食い詰めて谷間の村へ舞ひ戻り
尼ケ崎　長谷川三司

寢室の二人へ朝のオルゴール
お茶屋から通る棧敷は二幕目
よく笑ふ女で金はためて居ず
西宮市　田辺由布

競輪へ質屋の出店つめたすぎ
もめたけど儲けて帰りや酒もつけ
べたつけばべたつくほどに愛あまく
成熟の乳がまぶしい海水着

父の臍子の臍たのし夏の海
熊本縣　成瀬月仙

ライバルへ負けてはならぬ酒をのむ
逃げて行く女のやうなアドバルン
新婚の部屋はやたらに貼りたがり
盆踊り家の佛は忘れられ
兵庫縣　若林草右

醉ひざめへふと緣遠い娘を思ひ
たまさかの映画一人で來たを悔い
立話横でションボリ犬が待ち
大阪市　足立春雄

母の日に女であつた未亡人
世話焼きが一人乘つてたバスの中
晩酌で既う父ちやんは寢てはりま
大牟田　中村五醉

角帽の頃はよかつたトロを押す
諸行無常だが計画はたてゝおく
菲盤からの返事を妻はあてにせず
結構なお身分猫が死んで泣き
熊本縣　有働芳仙

悔いている朝の男の瞳を外らし
警察犬藻抜けのからを嗅ぎ廻し
香川縣　大西迷窓

朝顔へもう出勤の時間です
片道はゆつくり帰る産婆なり
空想に疲れ貝殻抱き締める
岡山市　延永忠美

父さんの労働オ一、二で蚊帳たゝみ
マチス展を見て
目も鼻もないのに名画生きて居り
中年のあつかましさと云はれる身
大阪市　浜畑胡蝶

交番の隣に住んだ未亡人
日記帖恋はピリオドうたれたり
人生を噛つてやつたバーの隅
下関市　石川侃流

街路樹は綠金魚屋荷を展げ
方言もなつかし三等車故郷へ入る
岡山縣　大森苑女

エチケットママに教える世のうつり
末つ娘に割烹服が似合い出し
梅雨晴れの嬉しさバケツまで洗い
お女中にやると或日をおどかされ
岡山市　大倉四案

簞笥一つだになき部屋の風通し
私服の日うつかり左を歩いてる
水嵩を尋ねる電話そらぞらし
岡山縣　水田草骨

教養とか言うのが西瓜匙で食い
友達は一緒に借りに行つてくれ
年頃と言われる事のもう長く
父よりも好きと少女の文くれし
別荘を出る浮袋供もつき

新川柳 評釋百句 (V)

昭和の作品から

麻生路郎

觀世音甘えてみたい御姿

（穗波子）

觀世音は神と佛との中性だそうだが性的に云えば女性である。しかも三十二相そろつた美人である。大和に旅すると、あちこちでよく國宝の觀世音にブツつかるが、何れも線の柔かい美形で、恍惚とさせられる。この觀世音をラツして來て、甘えて見たいとは作者の主觀にしても巧く表現していることに誰もがうなづくであろう。

一同の寸志汚い紙幣ばかり

（文　庫）

グレシャムの法則がこゝでは一番ハツキリする。寸志とか祝儀とか包み金をする場合にはワザワザ両替してまで綺麗な紙幣を包むのがエチケットであるが、一同でする場合には必ずしもこのエチケットは守られない。殊に僅かな金を寄せ集めるとなると、この句のように汚ない紙幣を平氣で出すものである。鋭どい穿ちの句だ

女なる悲しみおんな酌をする

（梨　里）

ズバリと鋭く女性批判を行つているのがこの句だ。作者は女性の宿命的なものを深く凝視して、オール女性のためになげいているのだ。自分が、その女の一人であることにも大きな悲しみを感じていることは云うまでもなかろう。

二部教授おそ出早や出と女給めき

（光　市）

閨風以來、教室が足りないのであつちでもこつちでも盛んに二部教授をやつているが、二部教授と云うものは、先生にとつても学童にとつてもありがたいものではない。今日はおそ出だ。今日は早や出だと騒いでいるのを聽くと、作者は何んだか女給めいて変な氣がすると云うのである。これも一つの觀方である。

もろてから大酒飲みと解るなり

（良　子）

男前が良うて、おとなしうて、秀才でと、エ、ことづくめをきかされて、もろうた養子――が、大酒飲みでは困まるに違いない。しかし大酒飲みだからヤクザな養子だとは断言出來ない。と一寸養子の肩を持つておこう。この句の面白味は穿ちにある。

宴會へ重労働の氣で出かけ

（潤　年）

日本の宴会ぐらい飲めぬ人にとつて迷惑なものはない。いゝ加減で切りあげさせて貰えないばかりか、変なのど自慢やお経に近い謡まで拜聽しなければならぬからである。君も一つやれと、云われればどんな、藝なし猿でも、鳩ポツポや、君が代ぐらいは唱わねばおさまりがつかない。そこえ、わしの盃がうけられぬかと妙にからんで來られると、飲めぬ酒も二杯や三杯はすごさねばならぬ。斯うなると下戸は全くみじめである。

色つぽさお二人様といふ言葉

（宏　方）

宿屋や料理屋で、お二人様御案内と云われて、ワクワクした氣持ちで階段を昇つて行くのは若い頃のことであるが、それもいつのほどにか何んの響きももたぬ言葉となつてしまうものである。しかし、デリケートな神経の持主であるこの句の作者は、お二人様と云う言葉に色つぽさを見のがさなかつた。それはもう作者が色つぽい世界に縁遠くなつて來たからでもあろうが、しかも色つぽい心の故郷に忘れ得ないものがあるからであろう。

ねんねこをワイフに着せるてれくさゝ

（菩　花）

汽車や電車の中でよく見かける風景である。ワイフが子どもをおんぶすると、一寸着せてと云われるまゝに、ねんねこを着せかけてやる。その時に、車中の人達の視線が着せかけている男に、一せいにそゝがれる。それを感じる男のてれくさそうな態度を描写したものである。この句では、その男が作者自身であり、てれくさく感じたので

ある。

残業に酒が出るのとつねられる

（四季無）

若い夫婦には違いないが、もう新婚の匂いはない。よく飲んで來るし遲く帰つて來る。今日は残業で遲くなつたと釈明するが、妻はもうそれを信じない。残業に酒が出るのと皮肉る。残業だつて酒が出るさと軽く一蹴すると、嘘をおつしやいと、つねられる。子どもが二三人も出來ると、もう斯んなことを云つてはいられなくなるのが夫婦生活か。

金持ちになれとは母ののたまわず

（白　星）

子どもの出世を願わない母親はいないが、必ずしも金持ちになれと云わないのが、母親のありがたいところである。平凡な生活をしていても、健康でさえあれば何よりよろこんで呉れるのが母親である。

改札口ライフで肩をたゝかれる

（春　雄）

相手は同僚か、それとも同窓か、兎に角親しい間柄であることはうなづけよう。出勤の途次だろう。改札口で会つて、「オイ今か」と手に持つたライフで軽く肩をたたかれたのである。振り返つて「ヤア」と應酬することも想像されよう。この句、写生句でもあり、穿ちの句でもある。

キヤツチボールの様に贈答くりかへし

（光　郎）

贈答と云うものは考えれば厄介なものである。やつたり、とつたり、やつたり、とつたり、同じようなことを幾度でもくり返えすのである。交際の廣い家の奥さんなどはこんなことに年中忙殺されていると云つても過言ではないだろう。それをキヤツチボールの様だと評したのがこの句の面白さである。

わたしも女妓の握手淋しく見

（梨　里）

藝妓は生きるために媚を賣るのが商賣、そして心にもない握手を幾度となく繰返している。それをジツとながめていて、自分も女であると思うと、フト淋びしくなつたと云うのである。若い同性としての心の動きを巧みに促えている。「わたしも女」と上七に据えたところが句意をウンと強調している。

學説は種々ありますと若い醫者

（蘇　子）

今の患者は自分の病氣についてよくいろんなものを読んでいる。ラヂオからの知識もある。何とかの雑誌に、こんなことが書いてあつたがと、随分突込んで訊く。若い医者はこれに應酬して、学説はいろ〳〵ありますと云うが、これならキツと癒るとは云わない。経験が浅いことを知つているからである。

吾老ひぬ子故の詐欺に二度も遇ひ

（表　情）

年をとると自然に子にあまくなる。そこをつけ込まれていろんな問題を持ちこまれる。金ですむことならとウツカリ乗る。よく〳〵考えると詐欺にかかつた訳である。が、又してもかかつて、はじめて自分の老ひを知つたと云うのである。うまく心境を詠んだところに作者の手腕を見る。

花の束女根こそぎほしいなり

（久米雄）

女は美を欲する。美を求めるこゝろは男のそれに比して遙に旺盛らしい。殊に花に対する愛情は実にこまやかである。一ト束の花を観て、その一つ〳〵の花を愛でると云うよりも、一ト束の花の綜合美に魅せられるものらしい。根こそぎ欲しいと云うのも女性の持つ独占慾がそうさせるのである。この句はそうした女性心理をうまくつかんでいる。

（つゞく）

社の黒板

▼本社主催・南海観光汽船後援で八月十九日に友ケ島観光川柳会を開催し友ケ島遊覧後、加太の淡島神社で句会を開く事になつていましたがマージ台風の影響か、海上波高く殊に加太へは寄港しなくなつたので中止の手配をいたしました。そのため当日、駅へ集合された諸氏並びに関係各方面の方々に御迷惑をかけましたことをお詫び申し上げます。

柳川 日光見物

川村好郎

川村好郎氏（東京）と松江梅里氏（大阪）はホントの兄弟で徴兵檢査まで兄弟であることを知らなかつた仲、今は共に不朽洞会員　（編輯局）

東武電車

氣が短くてあはて者の二人、一時間前から淺草東武電車の駅の改札口に立つてゐる。改札迄チット待つてゐる程落付いてゐる二人でない。便所へ行つたり、賣店をひやかしたり、動物園の熊のやうにあつちへ行つたり、こつちへ行つたり。

やつと定刻に改札、四輛連結の最前車に乗る。急行に乗つて一番前の車に乗つたら一番早く日光に着くと思つてゐるらしい。電車の中を走らぬだけまだ落付いてゐるつもり。

ウイークデーだからがら空きで梅里と二等車に乗つたつもりでローマンスシートに向ひ合ふ。

フト前を見ると二人連れが乗つてゐる。彌次喜多の二人には羨望の至り。どうして見逃がすべき。

「あれきづと二号やで」梅里まづ身分をあばく。

「男は五十二三か、女は三十五六やで」

「ア、女の三十五六か、三十と五六か」

「男は会社を休んで連れ出したのやな、いやな男やな」

「夫婦であんなに喋れるもんか、たまに逢ふからあんなに話題があるのや」

「女の方も大分参つてゐるな、あの嬉しそうな顔を見てみ」

「日光見物の帰りは鬼怒川温泉泊まりか」

「彌次喜多の日帰りと大分違ふな」

「あゝりんごを食べてる、男に半分やつたで」

「もう寝よう。あほらしいがな」

「運轉手はあつち向いてゐるし、向ひの男の人は居眠つてゐるし、進駐軍の兵隊さんは寝てしもたし、車掌は來ぬし、僕が見てなんだら何するやらわからへん、眠るものか」

とうとう日光駅まで居眠りもせず頑張る。

お蔭でアベックも無事。

缺勤が鬼怒川行の駅で待ちアベックの向ひが空いてゐる夜汽車

日光

華厳滝行のバスは流石豪華で美しい。バスガールも美しい。小学生の修学旅行もある。例のアベックも乗つた。大きなバスもすぐ満員になる。

おばんと税務署と寒いのと貧乏が大嫌いな二人はきれいそうな娘さんの隣に席を占める同じ料金ならその方が得やといふのが梅里の主義。

「一寸ポッポやな」

「ポッポやポッポや」

「ザーやろか」

「ザーやな」

（註・ポッポ、ザー、は梅里、好郎と其の一党しか通ぜぬ。ポッポはほゞ想像がつくが、ザーは一寸わからぬ。処女？　ノー、ノー）

バスガールに見とれて名所見そこない

遊覧バス生徒半分眠つてる

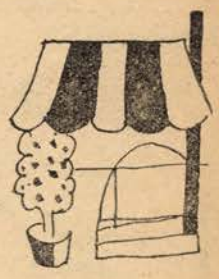
途中でバスを乗り換へて所謂四十八曲りの山道を走る。ポッポごころでない一つ誤てば千丈の谷へ眞逆さま、梅里もむつかしい顔をしてゐる。天竜川のバス墜落、酔ひどれ運轉手が頭に浮んでくる。

やれやれ山頂に着く、途端に腹が空く。おばんの居らぬ茶店をさがしたが日光はおばんが名物らしい。親子丼を注文した。五分、十分、なかなか持つて來ぬ。雞の卵を生むのを持つてゐるらしい。梅里そろそろ腰が浮いてくる。

「もう出よう、逃げよう」サッサと梅里店を出てゆく。この調子でいつも飯にはづれる。宿屋で下駄履きのまゝ風呂へ入つたらほんとうの彌次喜多だ。

華厳瀧

丸ビルの三倍もあるエレベーターで降りたら華厳滝が見えた。やはり日本一だ。富士山同様写眞より実物だ。雄壯華麗、自然の美こゝに盡きる。しばし呆然として滝の



川柳漫釈

——その二——

小畑自由朗

「うわー、降つて來よつたがな」

「いやゝわあ」

「君、傘持つてんの」

「えゝ」

「すまんけど、一緒に入れて帰つてんか」

「えゝ、でも夕立やさかいにぢき晴れるのとちがいまつか」

「いや、此の調子やつたらなかなか——あれ」

「ほら、向うの空が晴れて來よりましたわ」

「ちえッ、しようもない」

相傘で歸るつもりがもう晴れる

（竹　荘）

×

「おつさん、あんた其の七味の交ぜ具合い、薬剤師そつくりやがな」

「へつ〳〵〳〵、これでもあんた、昔々其昔はな」

「薬合ししてなはつたんかいな」

「暫く薬学校へも通うた事がおまんねや」

「ほう」

「ところが、しくじりましてな」

「落第しなはつたんかいな」

「いや、それがな」

「、、、、、」

「あんたもまだお若いらしいが」

「、、、、、」

「なんちゆても、つゝしむべきはなあ」

調剤のやうに唐辛子屋の匙

（太　路）

×

「もう仕度も出來たらしおまつさかいに、ごうだす皆さん、いつ迄もこない云うとつたかて、なかなからちが開きそうにおまへんさかいに、あつさりと札入れで賛否を決めてしまをうやおまへんか」

「そうだす、それでいきまひよ、なあ議長はん　あれ、肝ちんの議長はん何処え行きやはつたんやいな」

「あゝ女将、間島はん何処え行きやはつたか知つてやないか」

「へゝマーさんならさつきからお温泉に漬つて、今夜あんたらに聞かしてやんれや云やはつて「酒屋の段」のおけいこしてはれまつせ」

會議室一人抜け出し温泉にひたり

（青丹子）

×

「ちや、ズロースをぬいで寝台におほ向けに寝て下さい」

「はあ」

前に立つ。あゝ大阪にさびしく待つ女房に見せてやりたい。梅里ならんかと並んで居ても氣分も出ない。可愛想に。梅里も同じ思ひか瀧壺に目を落して寡默してゐる。

瀧の音しぶきも入れたいカメラ向け

中禪寺湖

湖畔の赤い橋に立つ事約二分。もうわかつたと湖に背をむける。これで中禪寺湖の見物を終る。

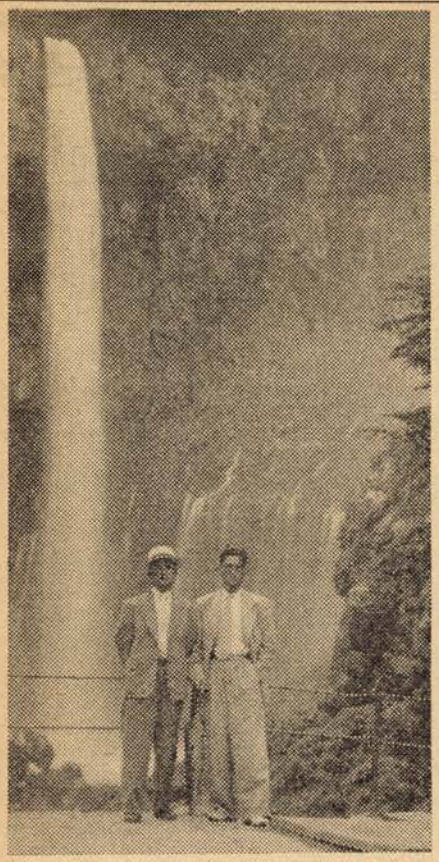
「こんな高い山の頂上にこんな大きな湖があるとは不思議やナー」と梅里妙な事に感心をする。

湖のほとりに團体向きの丹下左膳の百万両の壺が出そうな旅館がならんでゐて我々粹なお方の泊る所でない。

お寺や宝物を見るのがきらいな二人。これで終り。

男同志で來るでなかつた中禪寺湖

華嚴の瀧にて



向つて(左)川村好郎氏(右)松江梅里氏

余りくさしても國鉄にすまんから。

東照宮

東照宮の表門のすぐ橋に受附がある。拝観料百円也を拂ふ。別に案内希望なれば更に百円だ。錢出すことが好きでない二人知らぬ顔して門をくぐる。

「妙な鳥か虫か知らぬが鳴いてゐるぜ。日光特有の鳥かも知れぬ、やつぱり百円張りこんで案内して貰ふか」

梅里しぶしぶ札一枚を出す。第一間「この鳴いてゐる虫か鳥か知らんが何んですか」案内人答へて曰く「せみです」ギャフン。電車や自動車の音しか知らぬ二人には蝉の声もわからぬ。

眠り猫、鳴き竜、陽明門、拝観料の要らぬ國宝は観なければ二百円が損だとばかり忙しい。

案内人は、神社へ連れてゆく。アツと云ふ間もなく拝殿に飼はれた猫のやうに二人坐らされる。すぐ青白い神官さ　が「この神社は東照宮よりも古く、すべて國宝になつてゐまして……何やら何やら……(あとは立板の水でさつぱりわからぬ)……これからお神樂をあげます。お一人二十円以上で御座います。御拝礼がすみましたら宝物を御案内申上げまーす」電光石火、ドンドンヂヤンヂヤン、もうお神樂だ。豆鉄砲をくらつたやうな顔してゐる二人の上に、鈴がガラガラ鳴つたと思ふたら「どうぞ御神樂代を」と來る。金四十円否應なしに巻き上げられた。心臓の強い二人も唯あきれるばかり上には上があると頼を見合はす。

拝観料の要る宝物は通り過ぎ寄附芳名千円也が並んでゐる

○

午後八時目出度く浅草に帰着。梅里帰りの電車の中で何か書いてゐると思つたら「何事も奥の院には金が要り」と川柳でない青柳(あをやぎ)の迷句を作つてゐる。彌次喜多の旅は至極簡單、第一金がいらぬ。しかし愉快だつた。面白かつた。

七月十九日

いゝ思出だつた。

「さあ、どうぞ」

「はあ、でも私、いぼ痔らしいんですけど」

「兎に角診察して見ましよう」

「はあ、でも、私困りましたわ」

年頃の香り診察手間が取れ

(草一郎)

×

「おい、ちよいと買いたい物があるんだげど、少し弗が足りないんだよ」

「あゝ金ならそつちのデスクの引出しに四五十万弗ほりこんどいた筈だ、要るだけ掴んで行きな」

「そうは要らないんだけどな」

「一体何を買うんだい」

「下駄さ」

「又かい、ぜいたくな奴だな、先月買い代えたばかしやないか」

「はつ〳〵〳〵、玉年の殻が今年乗れますかつて云うんだ」

「日本なら同ち車で二十年から乗るんだがれ」

「止してくんな、此処は布哇だよ、あんな薄汚い弗を食の四等國とは違うんだよ」

自動車を買うから金を貸してくれ

(純　秀)

×

「おい、お前こんなボロ本三十円も出して引取つたらあかへんがな」

「ほつ〳〵〳〵、せやかて、あんた、ほら百円札の栞つきだつしやないか」

これはまた百円札を栞にし

(法泉子)

×

「でも、いつもそれぢやすまないよ」

「いゝのよ、どうせ洗うついでなんだもの、あらツ、この手拭い、紐が付いてるわれ」

「呀ツ、そゝそれだけは僕が洗うよ」

戀だろか洗濯物を引受ける

(青粒子)

残暑御伺

高　鷲　亞　鈍

大　西　野　介

亀　山　晴　峯

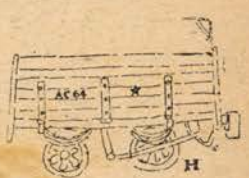
特殊紙器工業株式会社

大阪市阿倍野区晴明通一

近作柳樽

路郎選

村長がしくぢり村は活氣づき　兵庫縣　小畑自由朗
さらば古里
川だけは賣れづ故郷え殘しとき　同
もう踏まぬ故郷ぞ柿え肥えをやる　同
轉宅えお寺と稅金駈けつける　同
吾れ社長に就任す
八ツ折れを鳴らして菓子屋の社長也　同
社長邸市營住宅十二疊　同
自家用車チエンが切れたり外れたり　同
茂林寺文福先生え
身を以つて喜劇を画いて居りまする　同
生活の詩だ戰後派よ解るまい　貝塚市　芝無骨
チヤタレーの隣ニイチエの並ぶ書架　同
お盛んでなどと同業打診する　同
祖先の地新興風情が賣れと言ふ　同
勞基法もない蜜蜂のしぼられる　同
正直を買われた職が倉庫番　同
又しても求淑女を見つめてた　同
急停車娘眞つ向から抱かれ　廣島縣　黒本芳泉
八宗のほこりをはたく佛檀屋　同
冗談は云ふてますけど火の車　同
人老ひてやたらに道を說きたがり　同
そばかすの素顏で歩く歲となり　同
もう戀を知るか兵兒帶したがらず　石川縣　那谷光郎
金にもの云はせる程に貯める氣か　同
鉄の壁の様な男に戀をして　同
テニヲハを抜いて歸朝のよく喋り　同
ちよろすの民へ値上がのしかゝり　今治市　長野文庫
仰山に構へたトマト少しなり　同
しかめ面してる金魚が先に賣れ　同
ゴム印に露次の隅とは書いてなし　同
正月の写眞仲人持つて去に　長崎市　石井青馬
國宝と知らず地金屋値踏する　同
折箱を提げて和尚も芽出度がり　同
男娼の愚痴にあたいは冷性よ　同
乳バンド今日も四五人騙して來　貝塚市　津田千舟
看護婦の部屋頂いたものばかり　同
面会に聞く同窓の浮き沈み　同
路郎先生の武勇傳
ゴロツキを鼻紙捨てるように投げ　同
目覚は母なき家に鳴るものか　京都市　小石改メ村本香果
おもてゆく女を朝の顏に見る　同
たのもしい背丈キツスは上を向き　同
恋人の素顏を妻と呼ぶ日から　同
人事部の電話に立てば私用なり　鳥取市　森本法泉子
健康診断目方は靴のまゝでかけ　同
輸出品とかで斜陽が金魚飼い　同
役得は半額券を貰うだけ　同
小さい駅燕の巢あるなつかしさ　和歌山　秋月宏方
叩いても塗つても低い鼻であり　同
小兒科のおもちやかよわい子をだまし　同　堀内曉風
豪放と言ふへボタンはとれたまゝ　愛媛縣　同
吾が窓の雲に天氣の自信持ち　同
へそ繰が解つた妻の慌てよう　同
誘われた女の方がよく泳ぎ　岡山縣　太田又洲
避暑の客開けつぱなしで飯にする　同
錄音へ大阪弁がまくしたて　同　新谷風浪
パン〳〵になると言はれて捨てられず　大牟田



雜筆　春秋

中学一年の川柳

丸山弓削平

中学校の一年生が國語科の一つに川柳をやつている。これは空想ではない。川柳町弓削の一断面である。私はこの事実を誇る可きニュースとして送る。弓削新制中学校の國文の先生、福田智恵子氏は二ケ月程前から川柳を教育課程の中に織込んでいる。先日私は依頼を受けて一年生へ川柳の講義をした。その時渡された生徒の作品のプリントから目ぼしいものを次に列記しよう。これは第一回目の作品であるが、中には相当巧い句がある。それは小学校で川柳をやつたり（弓削小学校では課外として俳句、短歌と共に川柳も作らせている）川柳家庭の影響を受けているのが熟練として現われて来ているのだとも言えよう。

大掃除蚤も鼠も疲れ果て
父さんの土産を見ればいりこ丈け
僕炊いたごはん氣になる田植どき
自信のない額へテストの紙が來る
雨やどり本を一冊讀み終る
雨蛙もつと寢ないで鳴いて呉れ
酒のんだ父はヨラ〳〵フラダンス
麥刈は天氣予報に耳をかし

兒を背負ふてリストウオツチは派手な型　同
嫁かぬ氣の姉へ妹ちとあわて　同　石田　春峰
投げ賣へサクラも居ればスリも居り　同
今日からは失業手當をあてにする　同
一通話一円逢引成立す　同　貝塚市　坂東法界坊
疑はず居れば樂しい戀であり　同
女中ふとストといふ字を書いて見る　同
エロ本も聖書も讀んでアプレなり　同　山崎　虹介
たまに着た和服日本を呼び戻す　長崎市
万才師舞台に稅のことを慮ふ　同　伊藤　蘇子
シベリヤに歩いて行く氣老母の瞳　同
教会の自轉車やはり錠をかけ　新潟縣
貸本へ誰が書いたかゲーテの詩　同　渡辺　曉童
授業料未納のまゝでよく踊り　同
子について寢る役もあり子沢山　愛媛縣
処生談いさゝかのろけ入れておき　同
嚴然としてビルディング欠損し　同　岩垣日本村
追放解除おい金時計出して呉れ　高田市
奥様の機嫌天変地異に似て　同
当分は不束物でゐた筈だ　同　南要兒改メ
急病の子にどの医者も借りだらけ　岐阜縣　石神　古木
遺書を書く手とも知らずに蚊が一つ　同
河鹿なく何日までこゝに住めるやら　同
流れ出る汗を社長が見てくれた　岡山縣　田垣　方大
儲かつているのか煙り盛勢よく　同
竿ばかり一級品で釣れもせず　同
若いのが余つとりますよ解除せん　岡山縣　水谷　谷水
墓動くほどな出世がしてみたい　同
忍從と言う字があつたなと思い　和歌山　浅川　桑南
家計簿の赤字の月はメてなし　同
子を膝に読直す経またつまり　同
羊かんの着物を脫ぐとこうも痩せ　同

一人見る花火むなしきものと知り　東京都　松井　蛙声
ロマンスも無く東京の裏に生き　同
味氣無さキヤンデーの箸かみしめる　同　高峰　柳兒
病人の氣嫌蠅叩きを構へ　長野縣
闘病へ梅雨から眞夏のしかゝり　同
盲判乍らてきぱき押して呉れ　同
家計簿の尻え借金簿をこさえ　荒尾市　宮崎　馬笑
サンブルの名刺はお歷々ばかり　同
アロハシヤツブラスサングラスの構え　同
夏草へ半身見せて小便し　大阪　森本黒天子
終戰五年土藏のまんま煙が出　同
平凡で居て平凡の子を嫌ひ　同　岡田　夜潮
痴話喧嘩柱に倚りて鼻毛抜き　岡山縣
余りにも軽うて産婆拍子抜け　同
氣立よい女医だが妙に治らない　同
先生の恋はゆつくりピアノ彈き　兵庫縣　酒井ひかる
喧嘩迄した水だのに此の暴威　同
ニユールツク三兒の母と誰が知ろ　同　塩谷三思楼
逆境を更に氣にせず常の顔　石川縣
事務服に娘盛りという匂い　同
ただ喰けば良いもの植えて勤めの身　同　山本　焦兒
お供えの菓子が氣になる遊びよう　岡山市
オモチヤ屋の前で金切声をされ　同
箸持つて石往左往と妻の留守　同　岡田　夜潮
追放解除顧問の椅子が一つふえ　米子市
飽食らしいのばかりが当選し　同　由井　富郎
夜の街の華と唉くよに誰がした　同
質問の先陣くわつと頬がほて　出雲市
金の有る間大きな法螺も効き　同　武安　嘉彦
電柱に登つてとつた探訪記　貝塚市
階段を上る羚羊のやうな脚　同
月並に三船敏郎褒めといた　上坂　朱人

ニユートンの法則通り落ちて割れ（一九五一・七・三〇）

忘れねばこそ

安川久留美

私の手許にこれ迄何十遍と撮つた写眞というものが一枚もありません。それはナゼ？　私は自分の姿（過去）を後々に見ることがくすぐつたく、且つその一枚の写眞に依つて過去を追想することが堪らなくいやなのです。中には亡き父や母の若かりし日、叔父叔母の一家族などもありました。然しそれを墓く灰にしてしまつたのです。現実に生きるとすれば、古い写眞などがひよつこり文庫や抽斗から出る事は、とてもジツと見つめる時間だけでも無駄な空費と思はれました。

私がこのやうに写眞を片ツ端から灰にしてしまつたことは、虚無に生きる目的だつたのかも知れない？　だが一枚だけ長女がもつている。――それは長女の郷子が未だ十四才になつたばかりで、弟の茂道（六才）と共に撮つたものなのです。茂道の方はもう死にました。生きていれば二十四才ですから、その写眞は十八年前に川柳人高橋光春さんという方が撮つてくれた思い出の一枚なのです。それ一枚が長女のもちものとしてどこかに隠してあるやうです。私は納佛の新盆を迎へると共にその写眞を見たくなりました。彼の六才の頃は私も不惑を越していましたが、最も子煩悩だつたのです。有り合せの洋服をつけ、房のついた早稲田型の帽子に「幼一」の徽章をつけた天真らんまんの姿は、盂蘭盆

物ぐさは目つきも古本屋の主人　同
花賣りの乳張つて來て安う賣り　長崎市　北川　史風
お姑に平氣で田植尻を向け　同　同
恋人が出來て社用が多くなり　岡山縣　西山　秀峯
せちがらい世にすくすくと青い麥　同　同
受附の立つた小柄がおしいなり　尼ケ崎　赤木　紅山
そう不意に開けては男でも困り　同　松森　卯門
愉快々々ライバル犬に吠えられて　大阪市　同　丹波　太路
水藥へ此の世のにがさ喰佛　同　同　石居　高志
旅行記を讀む樂しみに居る病　堺　市
常識を疑ふ程の賞與にて　新宿御苑にて
ピースから光にそして新生に　東京都
俺だけがアベックで無く氣をつかひ　同
一切のサービス入れた請求書　大阪市　兒山　紫郎
もう一ツの視線で見られているモデル　同
ストリップ親父氣拔のした笑い　萩　市　多田　穗波
しやあ〳〵としてよれ〳〵の浴衣行く　同
トマトもう盜まれそうな色になり　熊本縣　森口　鶴堂
踊りたいなどと女は別れる氣　同　同
螢賣つて食へる話をきかされる　大阪市　木村　治
混血兒抱き大股で風呂に來る　同
競輪の如く構えた交叉点　京都市　藤原　和朗
泳げない者が歸宅の事を言ひ　同　同
反戰の詩をうたい療友留置さる　大阪府　太田　貧坊
公園と言へば疑惑の眼で見られ　同　同
金へンへ子供も惡い趣味になり　吳　市　余頃　紅兒
こゝからの人出へたもとかしてやり　同　同
別居して蚊帳の廣さのそのままに　愛媛縣　米沢　曉明
たゞ一つエネルギッシュを褒められる　同　同
アンリ・マチス展
素描いま六十年の血がかよふ　倉敷市　木村千代男
浮袋極彩色でちと目立ち　同　同
調理法說けばやつてと言はれたり　貝塚市　香木凡太郎
先生の給料云々する生徒　同　同　井野　格一
欲代はあるのにネクタイはげかり　岡山市　同　山崎青粒子
鉄道も雨には勝てぬものと知り　荒尾市　同　伊織　柳坊
筆不精書かずに居れぬ儲け口　同　同　加藤　司楼
香具師の藥すんでに俺も買ふところ　同　同　滝　純香
残るまい賣れようとして押しかける　下関市　同　岸本　木魚
有難や小人數の頭割り　下関市　同　上田　耕平
夕立にしばし空地の様な街　下関市　同　横田　方眠
くたびれて帰り蚊を追い蠅を追い　加藤　同　岡崎　泰三
四十の恋はホテルで別れて來　ハワイ　同　小山　彌生
割勘で飲んでるとこを誤解され　同　同　結城　寂坊
また隣何やら投げた音がする　和歌山　同　加能　潮人
請求書書かせ過納をまだ吳れぬ　同　同　青野天下堂
金へんの用心鍵を三ツつけ　貝塚市　同　野田素身郎
握つたら逃げ出さなかつた娘の手　同　同　花岡　英子
平凡な一生頭がはげただけ　大阪市　同　佐藤まさる
米も出來柿もなつてる母の里　同
屋根の色から大阪に來た氣分　和歌山
おむつから顔出して來る二階借り　同
日曜日犬も恋人まつてます　貝塚市
宿題へ手もつけぬのに休暇すみ　同
外交の方が參つた話し好き　愛媛縣
あこがれは消えて社会に出た女　同
新らしく着て羨望をひきつける　石川縣
醉うた眼にも銚子は不足なく竝び　同
ご心配なさいますなを信じきり　愛媛縣
にぎやかに露次を出て來る風鈴屋　同
金はないがひまがあつたで碁を習い　倉敷市
夜市の灯さけて何処へ行く二人　同
ひねりだすつもりかテストへ目をとじて　熊本縣
床の間もないおくらしへ花は活け　同
全國へ心臟紹介鐘一つ　出雲市
佐藤まさる

飛★燕★往★來

須崎豆秋氏（大阪市）より
——路郎宛——

先生　大変長らく御無沙汰しているやうで（本社句以來ですけれど）お目にかかりたいと存じ、チビ〳〵と酎っていましたが、実は今日、神戸へ集金に行つての帰途なので、腹がペコ〳〵ですから殘念ながらお目にかゝれずに帰ります。神戸へ行きがけに鮎美さんと会ひましたが、この二十二日（日）京阪神市電川柳会も二十九日（日）の北支部箕面吟行も、ストライキのため出席不可能のやうに言つていました。このスト宣言ポスターには「給與ベース九千六百四十二円では餓死あるのみです。皆さんの御にふさわしい映像です。

私が昔郷里の庭で、素人写眞師Nから初めて撮したのが矢張り六才の私の姿でした。亡き父、亡き二人の兄と並んで、うつむいている恰格は、少しも子供らしい可愛らしさがありません。だが、私の長男茂道の方は、いかにも無邪氣にうつつて居ります。その頃が最も父を慕つてもいました。長女が生れて八年ぶりに生れた男の子——それは目の中へ入れたいほど愛したものでした。

彼は「秋山道心信士」という戒名をこの世にのこして夭折しました。再び相見ることはない。だが、姉と共に写した一枚の写眞、これだけは「灰」にはせない積りです。この一枚も引き裂いてメラ〳〵と火の中へ投げることが眞に人生の諦めとなるかも知れないが。私は新盆を迎へて切籠に彼の法名をかき、一枚しかない写眞に花をさげました。やがて霜月の一週忌を迎へれば、遠き過去の人として夢の如く忘れてしまいたいのです。

草の葉の露に惠みの陽が当り
（二六・七・一二）

観光客みんな儲けたような顔　同
この年で職を探しにとも言えず　池田市　太田　木声
殺す氣の手とも知らずに蚊はとまり　同
蔭歩く犬の姿も眞夏らし　高知縣　岡本　元馬
親切をつばめの親に誤解され　同
何事も夢にしておく淋しい日　京都市　鈴木加代子
あと一問妻は笑つて居るばかり　同

梅雨來る

玄関に溜つた水で子は遊び　姫路市　木下　和水

廣島にて

廣島の風にネクタイたなびかし　同
ほつときもようせずぼやいて洗濯し　大阪市　山本　葉光
先代の恩へ夫婦の氣が揃い　同
鉛筆を握つたまゝで寢てしまい　岡山市　坂井　三葉
寢轉んだ夫に妻の用がふえ　同
賣り家にかゝわりもなし燕の巣　京都市　佐久間折草
衝立で仕切るそば屋に恋があり　同
糞度胸あるなと思や白痴なり　大阪市　東　喜久堂
飲めぬ筈の新郎見事に猪口を乾し　同
傳記みな餓飢大將の歴史持ち　貝塚市　宮本　甲馬
又惡いことをしよつた元巡査　同
解除の日予備隊行きをすゝめられ　米子市　小西　雄々
恋愛をしてから趣味が一変し　同
父ちやんの病氣は永いネと便り　貝塚市　会田　一郎
嘘多い便り勉強もしてゐます　同
なめくじの存在に似た客が來る　愛媛縣　村上　和子
不自然に氣取る言葉が又もつれ　同
パン〳〵と知り用のない道を聞き　大牟田　松尾　啞牛
引揚のランチあれあれあれが父母　熊本縣　西野斗四翁
追放解除何等かゝわり無い暮し　高知市　松下一徹郎
珍らしき知人に逢うた安定所　下関市　向田妻楊子
書寢せん風強からず弱からず　愛媛縣　田村　光葉
大学生知性はカケラほどもなし　大阪府　上島きはち

無造作に首の手紙をほりこまれ　岡山縣　椙原　一善
円満をいちやつくという第三者　大阪府　青柳扇子仙
心臓を大きく持てとはげまされ　宮崎市　野口卯之助
改札へパーマになつた顔を見せ　新潟縣　田部　星一
税務署へ勤めさすなと母案じ　愛知縣　武内　夢佛
天も地もわが独酌の玉杯に　米子市　石尾　鈍頑
妻にはなるが母にはならぬ氣で嫁ぎ　愛知縣　本田　柳人
神経が花瓶の位置を変へさせる　貝塚市　斉藤　一蝶
球拾うだけの野球部金が要り　大阪市　木村　水堂
産むだけの役目を果し後家となり　愛知縣　岩瀬　雨蓮
社長室ツンとした娘を育て上げ　長野縣　中村　去秋
未知の娘が兄の命日聞いて去に　貝塚市　望月　酋魚
標傍をする貧乏は少し有ち　岡山縣　葉山　縁二
アルプスをバスで新婚越えて行く　愛知縣　山下山太郎
心中の折詰(オリ)とも知らず子はハシヤギ　芦屋市　後藤　志津
探す子が隣の花火え客に座し　岡山縣　田中　敬貢
溜息は財布の底が見えた時　荒尾市　河内　笑風
ストライキ会社の方はもうなれて　岡山縣　大橋　中州
手酌ではやれずついでもくれぬなり　愛媛縣　村上　旭堂
何時來ても社長も係も金も留守　大阪市　三木　泡起
回復期寢椅子のまんま撮つて見る　京都市　井上　吉造
野球狂妻にリンゴを投げてやり　岡山縣　大塚美能留
父親に似たはズボラな所だけ　京都市　藤原みてい
ランドセルの重さに耐えて二年生　岸和田　高橋　操子
肉体美見ても鈍感老いを知る　岡山縣　池田　古心
チンパージ仲良くコーヒ飲んで見せ　京都市　上村　春風
迎え傘隣のボンも拾ろて來る　貝塚市　池崎　箕水
家出する娘を猫が見てしまい　京都市　若山　圭草
アベックのボート河童が邪魔になり　岡山市　平岩　作州
年拾ひ修身斉家恋しがり　出雲市　石橋　斉兆
朝鮮語雄弁家でも歯が立たず　兵庫縣　吉原　紅月
長男が出來ても簞笥未だ買えず　岡山縣　北口　草人

同情を乞ふ」といつたやうな意味のことが書いてあります、がベース六千円余りで、何の特典も無い町工場の「皆さん」はこれをどう見ているか、狐につまゝれたやうな顔して朝晩、改札口でこのポスタを拜読していることでしよう。

僕は時事批評吟は絶対に発表せぬ方針で、手帖に大分たまつてはいますが、焼きすてるには惜しいとも思つています。

とき〳〵ムカ〳〵してたまりません。

われらの首相路郎師へ　大塩平八郎拜

田辺由布氏（西宮市）より

路郎先生　お手紙ありがとうございましたその後も、たいして変りなく寢たり起きたり、読んだり書いたりで療養をつゞけて居ります。お医者さんは少しづつ良い方だと言つて呉れますが結局、アンドレ・ジイドが言つたように「治ることではなく、病氣と共に生きる」ことだと思います。

病氣と酒と女と取つ組んで、グッド・バイした太宰治もありますが、病氣と共に静に長生している長谷川如是閑もあります。医者から、生きているのが不思議だと二十年も前から言われていて、今でも年に一度は銀座へブラリ出て來る「ブラリひようたん」の高田の保ちやんも、もう還暦だろうと思いますが健筆を見せて呉れています。

まア、大事に使えば、一生ある生命と云うことなんでしよう（後略）

確実避妊のために
山之内
サンシーゼリー
セット　250円
ゼリー20瓦90円
同上　50瓦180円

武藏坊弁慶（下）

富士野鞍馬

義経は兄頼朝と不和になり、陸奥の藤原秀衡をたよることにして、文治三年二月十日に京都を出立、弁慶も従い、一行山伏に扮装して陸奥へ下る途中、加賀の國安宅の関（現小松市の三里程沖にあたる）で、義経を強力に仕立て、自ら俊乗坊澄源と称し、機轉の東大寺建立の勧進帳を読んで、ようやく通過したという話は、謡曲、芝居になつていて、弁慶といえば第一にこれを想起するのである。

弁慶も安宅できけばうそをつき（武 八）
山伏を初てはとが〳〵しくとがめ（タル一五）
武藏坊あたかもまことらしく読みとがしめを勧進帳で言ひひらき（〃 三五）
よく〳〵のこと弁慶も珠数を出し（〃 三六）
武藏坊安宅を越して舌を出し（〃 四六）
めづらしい忠義主君をぶちのめし（〃 五一）
五條ではぶたれ安宅ではぶちのめし（〃 五九）
山伏で勝利安宅と大江山（〃 一三六）
山伏にたび〳〵ばける源氏方（拾 六）
年玉のように弁慶投てやり（タル二八）
山伏姿であるから、普通山伏が年玉に配る扇子も思意していたであろう。

弁慶は七つ道具をいつも背負つていたといわれ、絵にも書かれてあり、その七つは、鋸、鎌、斧、槌、刺股、熊手、棒、であつたようである。

むさし坊とかく支度に手間がとれ（タル 初）
弁慶は四日一歩の出立なり（拾 六）
休む日に目立屋を呼ぶ武藏坊（タル一四七）
やすりまで箙に入れる武藏坊（〃 一五六）
陣屋の繕い弁慶が罷り出（〃 ）
弁慶の道具も七ツまでかざり（〃 六六）
寝かしものともに弁慶八ツ道具（〃 九一）
弁慶の道具かざるも七ツまで（〃 五〇）
等と四日一歩の大工に見立てたり、一物を入れて八ツなどと洒落ている。

又大きな珠数を持つていたり、長い鉄棒もつかつたので

弁慶の持ちそうなのを珠数屋かけ（タル四九）
弁慶はいちかち指で珠数をもみ（〃 一四三）
弁慶の杖八尺の鉄の棒（〃 一一三）

芝居等を見ると髪をのばしている。

武藏坊播磨で剃つたまんまなり（タル一〇）
月代を剃ると弁慶弱く見え（〃 一二二）
たてるともそるともつかぬ武藏坊（拾 六）
英雄僧弁慶も上方弁だつただろうと
むさし坊あつたらことに上ミ言葉（タル 四）
弁慶だつて湯に入る時は裸である
湯に入ると弁慶ただの坊主なり（タル一四八）
後に陰弁慶という言葉もできて
弁慶はかげできいてもつよい事（タル三八）
弁慶も陰と炬燵は今にあり（〃 ）
いよ〳〵弁慶にも最後がきた。文治五年（一一八九）四月三十日陸奥の藤原秀衡に身をよせていた義経は、秀衡の弟泰衡に攻められて衣川の館で自殺した。その時弁慶は衣川で立往生を遂げたという有名な話が傳つている。時に義経は三十一才であつたが、弁慶の年はわからない。

弁慶は山で育つて川で果て（タル三四）
衣川かげ弁慶のはじめなり（〃 五八）
弁慶とへのこは立つて往生し（〃 七四）
衣川庭の水屑に六ツ道具（〃 一三五）
「衣川さゝい槌ばかり流れけり」である。
豆殻で豆を煮詰める衣川（タル一五四）

七歩詩を秀衡泰衡兄弟になぞらえている。

弁慶は正に愉快な怪僧であつた。日本に永久に面白い話題を残してくれた。まだこの外に義経も弁慶も衣川で死なず、北海道から蒙古へ渡り、英雄成吉思汗が義経で、その勇将速不台が弁慶であるという面白い説もある。又弁慶の遺跡というのは物語り的のものが各地にあるが、藤沢の白旗明神の前に弁慶の首塚というのがある。この社は義経の首を鎌倉で実検の後此所に祭つたといわれている。

序に弁慶でない弁慶の古川柳を拾つてみた。

わらでたばれても弁慶は弁慶（タル三八）
弁慶とあてたに干鱈くりやがり（〃 三〇）
弁慶の使ささごでのんで居る（〃 九）
弁慶をさげて女房のいゝみやげ（〃 五四）
弁慶へ忠信をさす王子道（〃 一〇九）
弁慶をとりまいている源五郎（〃 一一四）
弁慶にさす燒鮒の源五郎（〃 ）
弁慶に錆長刀の秋の鮎（〃 一三二）

殘暑御伺
烏ケ辻川柳会
（イロハ順）
市場沒食子　津村　神峰
池戸　桃村　中谷葉栄子
井上　明欣　牛田　晴夫
橋本　幸男　尾崎　方正
橋本　峰春　太田　良子
西川　惠風　山本　新陽
西辻　竹青　藤田眞砂志
若林　草右　小沢　史葉
金森小夜子　足立　春雄
吉田　斜水　水谷　竹荘
多田　禿天　森下　愛論

弁慶にしよはれぬものに太刀の魚（〃一一六）

弁慶へぶらりと煤のさるをがせ（〃一一六）（〃一三六）

関東では一尺程の巻ワラで魚串などをさしておくものや、竹筒に穴を開けて台所道具をさしておくものを「弁慶」といった。つまり七ツ道具を背負う恰好からつけられたのであろう。それで右の句はみんな判るであろう。

伊予染の浴衣の供に小弁慶（タル一三九）

弁慶を長刀に断つおくみ先（〃一五六）

今でも格子縞のことを弁慶縞という。

月みちて流すはおしき小弁慶（タル一一七）

質屋の手代弁慶に繩をかけ（タル五〇）

「七の字と他人ではなし十文字」という句もあり、質屋は質物に十文字に繩をかけたのであつた。

夏相模秋は弁慶冬小町（タル一四〇）

これは俗にいう「春三夏六秋一無冬」で、弁慶はたつた一度きりであるから秋というわけである。とうとう大尾になつてしまつた。

尚昔大阪で幇間のことを「弁慶」といつた。これは大盡客を「判官」といつたから、それに附ものとしての流行語であつた。又元禄の頃、江戸の奴仲間で「あんだ弁慶」ということばも流行したということである。

柳魂見つけたり

——先輩A氏に此の拙き一文を捧ぐ——

直原七面山

鳴呼思へば、あの日あの時から、私の柳魂を求めての果てしない漂ひの旅が初められたのである。

×

一、路郎師の面影

（A）生々庵氏の宅にて

昨年の五月、初めて私が柳友笑泉氏と共に、大宝文化会館の本社句会に出席した夜、私達は、師と豆秋氏に伴はれて、生々庵氏の宅にお邪魔した。

遠慮なく侍つた酒席で、私は生れて初めて師弟愛の美しさと言うものをしみ〴〵と味はゝされたのである。

師を中心に、生々庵、豆秋両氏の和やかに交される柳談、そして意見の交換等々、それ等幾多の言葉には、唯一点の曇りもなく、然も清く澄み切つてゐて、大きく豊かな丸味さへ帯び、ほろ酔加減の私の耳朶に、恰も子守唄の如く、快い響を與へて呉れるのであつた。

両氏の師を慕ひ師を敬う心情は、その動作その言葉の端々に迄伺い知られて、師の弟子達に注ぐ慈愛の言葉と共に、その部屋一杯に漲ち漲ちて行くのであつた。

思へば師は川柳に対し絶体であり神であるのであろうか。

あゝ来て良かつた、会へて良かつた。師に、そして此の大先輩達に、柳魂に徹した之等三人の姿は、何と美しく、何とけだかきものなのであらう。

その雰囲気に誘はれてか私の心の中に、何かどゲット込み上げて来るのを覚へた。

頬を傳う故らぬ涙の露！川柳の都大阪の五月の夜も、静かに更けて行くのであつた。

（B）ホテル北極星にて

生々庵氏の宅を辞して、私達は、再び師と豆秋氏に見送られて、師が御心配下さつたホテル北極星に帰つて来た。

一絡電車、良いちやないか、豆秋君、乗遅れたら歩く迄の事さ、節角此所迄来たんだ、部屋迄送つて行つーと、終電車の時間表を無視して部屋の中迄見送つて下さつた師と豆秋氏。

「ダブルベッドだ、仲よ、寝るんだよ、おつこちない様にな」酔ひ覚の水の事迄心配して下さつて、さよならと、例のステッキを振り振り帰つて行かれる師の影をドアーの外で見送つてゐた私は、フト例様へもない大きな熱も温く奥深く頑丈な壁にでも突き当つた様な衝動にかられ、その場にジーツとたゝずむのであつた。

師の限り無き迄の私達への此の慈愛！

何時の日か私は川柳を通して此の慈恩に報いねばならぬと思つた。

その時恐らくは無意識の中に放たれたであらう師の魂の白き矢は、見事私の心臓を貫き眞赤な血しぶきを上げしめたのである。

嗚呼！師の此の魂の閃きをこそ柳魂と言うのであらうか。

私はベッドの上に横になり、ジツト天井を見詰め乍ら、先刻師の依頼で運ばれたテーブルの上の水差しとコツプに手を伸した。

一、滋賀の友

約三十間許り向うの路上に、フト飛び出して来た青年の影、互に求め合う相手である事を知つた私達は、期せずして三つの右手を五月の空へ振り上げてゐた。之が美秋、笑泉、七面山の初対面の姿である。

弟の木人さんを混へて四人は、十年百年否千年の知己の如く、鍋の肉をつゝき、酒にビールに咽をうるをし乍ら、時間も忘れて川柳界に漂うのだつた。

語るに従つて、美秋氏の春巣氏を称へ、豆秋氏を評すその言葉は、次第に熱を帯び、声は震へ、目はギラ〳〵と光り輝き、例へば神を敬い慕う信者の眞心が、その全身にみなぎつてゐるかの如くであつた。兄である春巣氏、父である豆秋氏、美秋氏の言葉は盡きない。思へば滋賀の友美秋氏をして斯くも感動せしめ、斯くも熱弁ならしめしものは何か、若き川柳作家美秋氏の魂を斯くもゆすぶりしものは果して何んであるのであらうか。

将又、恐らくは見知らぬ他國の人として、互に何の係りもなく朽ち果てゝ行つたであらう滋賀と岡山の私達が、フト行きづりの川柳誌を通して互に知り合い、然も、幾十幾百里をものともせず旅して一室に会し、何のこだわりも持たず心行く迄、精魂を傾けて語り合う川柳の道、見ず知らずの私達をして斯くあらしめたものは、果して何んであるのであらうか。向ひ合う私の胸にそく〳〵として迫り来る美秋氏の友愛の波動、魂の雄叫び。

一駅に行くのは四年目なんですよ一氣づかう母君の言葉を背に、自轉車で駅迄見送つて下さつた病身な滋賀の友、何時の日か再び相会う事を約して、私達は一路京都へ向つた。

×

之を初旅として、私の柳魂を求めての旅は限りなく続けられて行くのである。

川柳から見た 産兒制限と避妊藥

市場沒食子

天皇陛下が現身の神を否定せられたのをきつかけに、終戰後の我國は百八十度の轉換を見せ、すつかりその全貌を一新し、民主國家としての息吹をし始めた。戰爭放棄もその一例だし、男女同權も亦その一例である。斯うして擧へ上げる愚を勞せずとも、實に目まぐるしい變遷であつた事は御承知の通りで今更古臭く言ふだけ野暮である。棚ボタ式に自由を獲得した氣安さと封建性の反動からか徒らに權利の主張に急で義務の履行を怠る矛盾が、そこかしこに見受けられるのも過渡期の一現象として無理ならぬ事ながら後人の笑ひ草になる樣な種は少しでも間引いて置きたいものである。愈々待望の講和が近づいた。ダレス氏の提示された講和草案は幾分ポツダム制令より緩和されたとは言へ、事領土に關しては四大島とその周辺の幾つかの小島に限定される事の必定な現在八千幾百万といふ人間が平和に暮して行くには餘りに領土も狹いし天產資源にも恵れ無き過ぎる、人口問題とそれに絡んで食料問題とが平和日本の再建に大きな癌である事は、言ふを待たない。產制問題が云々され、避妊藥の登場となるのも宜なるかなである。

かつてサンガー夫人の來朝の砌り、非常なセンセイションを巻起した事を想起すると、產制は以前から頭痛の種であつたらしく、國情の違ふ當時としては、是を受入れるどころか一種の罪惡感さへ抱かしめていたと言つてよい。とは言へ一部では密かに產制を實行していた事は事實で、インテリ層に殊の外この傾向が强かつた事は頷けるので、彼等進歩派と云ふと一寸語弊があるが、サラリーマン階級は貧乏人の子沢山の諺通りに成たくなかつた理由が多分にあつたろう。そんな詮議立はどうでもよいとして、戰後日本に大きくクローズアップした產制と、避妊藥は戰前戰中見る事の出來なかつた文字である。是等の文字が堂々と新聞、雜誌に、或はポスターに掲げられた當時は世の移り変りに眼を見張つたものである。だが文字にこそ確に眼を見張らせるものが有つたが、内容的には格別驚か無くとも、古くから衞生サックとして色々な形態や種類の物が賣出されていて、避妊の目的にも使用されていた藥物にしても、セモリ、サーナ、ゴゼイ等が出ていて花柳病予防と避妊に使用されていた。その他、オキシシアン水銀を主劑とした外用劑が相當賣出されていて表面は花柳病予防の宣傳であつたが、伏線に避妊の意味が藏されて居たのは否定出來ない事實であつた。

明治時代は扨置き大正昭和の川柳を克明に調べる時間も持たないが、戰前は產制や避妊を暗示でもすれば直ちに發賣禁止の鉄槌が降りるので、業者側も廣告に使用する文字には細心の注意を拂つたらうから川柳人に尻尾を捕へられる樣なヘマをやらなかつたと思ふし、例へまた川柳人もそれを見付けて句にしても發表も出來ず、自己の句帳にノートしたゞけに止つた事だらうから、恐らくは產制避妊の句は無いものと思ふ。古川柳で眼に付くのは墮胎の句で、墮胎も今日となれば立派に產制の合法化された一手段であるし、中條流は當時の雰氣感も拭はれたし罪惡感は吹飛んでしまつた。

扨て時代の寵兒であり、アプレゲールの申し子である避妊藥であるが、確に時代の潮流に竿さして花々しく、そのデビュー振りは見事なものであつた。錠劑にゼリーに色とりどりで雨後の筍の樣に出現した。その一つ一つの品名を覺えるだけでも可成の努力を要した事である。或人は錠劑が手輕でよいと云ふし、或人はゼリーの方が効果的だと爭ふし、又その泡解度がどをであるとか、効力檢定の結果がどうであつたとか、研究資料に幾つかのテーマを投じ、昨年の日本藥学会總会では相當に賑したものであつた。川柳人も何條このテーマに無関心で居る筈はなく今手許にある川柳雜誌の近刊から拾つて見る。

世は移る避妊の文字のそこかしこ　沒食子

実際世の中の一轉に対しての驚きは一人作者のみならんやである。他人事の樣に買つてく避妊藥　寄郎

ことづかつた樣な顔して避妊藥　巖

從來から衞生サックを買つてくる時も、お客は頼まれた樣な顔をしていた。顔がさすとか、恰好が悪いとか、恥かしいとか云ふのは日本人の常で一面長所であり、一面短所である。斯う云ふ場合、大低近所で買はない場合が多い。

避妊藥すでに達者な子が五人　茶佛

五人も子供があればもう結構なのは当り前の話で、現在の食事情からすればオーバーしてゐる位である。一公務員の私など三人の子供を持て余し乍ら通学させている。

処女性は失ひません避妊藥　文庫

さあそんな事は保証の限りでありませんよと藥局の髭の先生がのたもうたかどうかそれは知らんが、未だうら若い女性の遺失物なるハンドバックの中から避妊藥の出て來た例は新聞に出ていたし、外にも話を聞いた。

さすがらぬ嘆きあるのに避妊藥　万年

実に浮世はまんならぬものである皮肉に出來上つている。それで面白いのである。毛生へ藥の本舗の主人が若禿であつたり、補血强壯藥の主人公が顔面蒼白痩軀鶴の如しの例も多い。

神秘もう破れ一個の避妊藥　玲之介

神の力と科学の力の磨擦面も面白い。斯くて人力で產んだり產まなかつたり、自由に出來る世ともなれば造化の神は自ら失業せざるを得ん樣になるだらう。

避妊藥もう知つていて親泣かせ　孫掴

アプレ女性は須からく男性的である。それだけに又親泣せでもあり夫泣かせでもある。親は子を育てる義務があるが、子は親を見る義務がないとかなんとか、例へ口だけにせよ新しがつて放言する。從つて變轉極りなき戀愛をやつて

山銀の瓶

大阪市大淀區長柄西通一丁目四番
山銀株式会社
電話堀川四四七番

一品料理と生そば
グリル芝鶴
上六キヤピトル映画館東三軒目

のけるしキツス以上に出るのも平氣の平三か
たゞくれてもと避妊藥へ妻　春巣
妻の無理解を攻めるべからず自然に從ふ妻の美を取るべし、封建性の一部が妻のどこかに殘つていると評するのも酷なり、されど又斯くて又忘れた頃に孫の樣な子を產むことになる例も間々あり。
その他眼に付た句を揭げると藥局の見易いとこへ避妊藥　笑泉
避妊藥それでも妻は不安がり　柳慶
避妊藥宿の女中に敎へられ　甦光
長男が遊くとも知らぬ避妊藥　香林
避妊藥附錄であれば買ひ易し　松花
等々未だあるが是位にして置いて產制を詠み込んだ句を少し拾つて見ると
產制の廣告ちらりと橫目で見　利枝
產制が余儀なき日本のけつまづき　柳兒
產制を嘲ける樣におむつ干し　草右
制限の藥もあるに又生れ　小松園
產制の網をくゞつた子が生れ　美秋
產制と知らす里では待ち詫びる　美秋
產兒制限を說く藥局の小窓より　宇都羅
產兒制限どこ吹く風の產みつぷり　慈郎
是等の句について解說を試みても面白いがこゝでは略して置こう。
時代の花形として羽ばたきした避妊藥も効果の点で色々と云々されゝ、期待通りの實行を見ないのみか最近は効かないものゝ代名詞に使用されるに至つてはむしろ哀でもある。その原因は余りに米國風にこだはり過ぎた故か、そんな事は知らないが、製造業者の濫立も一原因であらう。近頃實行はかばかしからざる會社は、その製造を中止し大分避妊藥の名も消えた。
然し良品は市場にその名を止め勇姿を店頭に見せている。粗惡品の陶汰は止むを得まい。避妊藥が衞生サックに負けない實行を見せるには未だまだ檢討の余地が充分殘されていると思ふ世の要求の爲めに、良品にして手輕で値段の安い物の出現を筆者は祈るものである。

一路集

網棚

浜田久米雄選

網棚の来とは遠いとこに座し　草骨
網棚へ不孝を詫びる荷がかさみ　三思樓
網棚に油斷のならぬ眼をくばり　山雨樓
網棚へのせ損うた汗をふき　夏六
網棚をたしかめて見て又眠り　芳泉
網棚の荷物どうやら泊りがけ　日本村
網棚へ赤い風呂敷上げてやり　紅月
網棚の空いてる方に席をとり　草人
網棚の荷が踊つてる急停事　悦子
網棚は盜られるものと祖母はきめ　若柳
網棚もきちんとさせて一人旅　司郎
網棚へ予報信じた洋傘をさし　青雨
網棚へのせて一座はよくしやべり　虹介
網棚へ又新郎が立たされる　芦穗
網棚へ稽古戻りの花が搖れ　鉄兒
伸び伸びとして網棚の荷をおろし　曉舟
網棚にちよいちよい用の女秘書　魚美
網棚に置かない包一つ持ち　牛歩
ばあさんの手が網棚へ届きかね　格一
劇團の下車網棚に手間がいり　菩花
網棚に頭を打つてパスを降り　日滿子
東海道網棚で行く忘れ傘　蛙声
網棚へ見送りの母念を押し　十九平
網棚へ故郷の土産は大きすぎ　又州
網棚へ全財産の旅役者　滿年
心を鬼にして網棚をしらべ　方大
五・網棚へ遠足の子の手がつゞき　秀峯
〃網棚は母の情でふくれた荷　山雨樓
〃そんな氣もなく網棚へ腕を貸し　草一郎
〃網棚へ五尺の丈を後悔し　ひかる
〃網棚に処女の大事な忘れもの　斗四翁
人・網棚へ妻を驚かすものを乘せ　滿年
地・網棚の大きく搖れる東海道　馬笑
天・網棚へはのせど悲しい旅であり　みてい
軸・落ちそうな網棚の荷へ助言が來　久米雄

水藥

北川春巣選

水藥をさげて役所へ廻り道　九呂平
水藥さげても母校の應援歌　蛙声
水藥を包んでハンカチ丁度よし　みてい
藥瓶さげて病院出る歩み　英子
食前に飲む水藥のまずい味　三思樓
水藥ちと苦いので効くらしい　又州
水藥も包んでほしい苦さなり　牛歩
水藥の味が変つて癒りかけ　葉光
水藥苦い羊羹にしてしまい　笛生
大げさに水藥苦い顏で飲み　格一
水藥飲むのをりんごむいて待ち　同
水藥の甘さたまの風邪もよし　若柳
水藥智惠をしぼつて子に飲ませ　雄々
水藥子供のぶんは味が良し　四案
水藥子へあん蜜の話する　夏六
水藥飲んだ子の顏快くも見え　ちか子
快方に向いて水藥ほろ苦し　実信
匂いだけなら効きそうな煎じ藥　同
よく振つて飲めと水藥沈んでい　光郎
臨終に重く淀んだ水藥　芦穗
水藥の泡七色に陽をはじき　千舟
水藥ごくりと喉が音を立て　十九平
水藥酒ならばなと云うて飲み　代仕男
水藥も飲み晩酌も飲んでいる　梵鐘
水藥の又も一キザ飲み忘れ　千代男
きつちりと日盛をすかす水藥　忠美
水藥の日盛苦さへ大き過ぎ　滿年
何べんも筋見定める水藥　ライト
癒りたい眼が水藥の日盛晩む　夏六
水藥の日盛押へる手が白い　紅月
水藥今日から色が白くなり　甦光
水藥加減してある色となり　方眠
水藥色が変つて効く予感　芳仙
水藥変り病狀捗らず　青粒子
同病と云う水藥見せ合うて　陽々
水藥今日の機嫌へ飲み過ぎる　青粒子
水藥忘れていても同じ熱　草骨
出張の宿でさびしい水藥　鮎美
冷藏庫に水藥も入れて夏を病み　光郎
水藥の盃星の絵にきめる　菩花
眼病に藥師如來の水藥　大彦
無造作に藥局蒸溜水を足し　梵鐘
二三遍振つて水藥出來上り　鉄兒
水藥殘して全快祝いする　卯門
五・水藥置いて病人らしくなり　美能留
〃水藥蒸溜水も金になり　紅月
〃いゝ人が來て忘れてる水藥　折草
〃振つて見る健保で貰ろた水藥　芦穗
〃咳止めは藥瓶から直きに飲み　曉舟
人・水藥ほめられている母の膝　孤峰
地・水藥パンパンと云う枕許　山雨樓
天・全快の裏庭に撒く水藥　日滿子
軸・散藥にかえてもろうて旅に出る

いのちある句を創れ

投稿規定　▼用紙は原稿用紙▼文字を正確▼開催月日及場所記入▼締切毎月廿五日▼投稿先本社宛

本社七月句會（大阪）

七月七日　午後六時　於　大宝文化会館

梅雨空の蒸暑い天候であつたが、作句三昧に這入つてゐる会場では扇子の鱗る風景さへ見られなかつた。当夜路郎師は健康を害してゐられたので柳話は極簡單に「五体の何れかに缺けた処のある人は一の物に熱中するものであつて、天分以上に其技倆を発揮するものである。まして完全な五感を俱へてゐる幸福な吾々はより以上に物に專念すべきである」と大いに我々に喝を入れられた。水谷鮎美氏は愛論、柳堂、五醉、梅里の諸氏の句を引用して所感を述べられた。兼題・席題の披講後採点発表をして午後九時半閉会した。本月の不朽洞優勝カップ把持者は東喜久堂氏であつた。

出席者＝路郎・鮎美・紫香・愛論・翠光・白香・一杉・喜久堂・博也・水堂・哲水・正司・眉水・三司・七郎・豆秋・扇子仙・無人・春斎・てるを・夢裡・緑雨・芦穂・梅里・正則・恒明・灰兒・緑博・三晃・いわを・貴山・志乃布・へとち・竹荘・春柳・妄夢・生々庵・幽王・敬子・小松園・栞・鋭々・卯門・よか楼・梨里・葭乃

兼題「総入歯」　麻生路郎選

総入歯同志明治を懐かしみ　水堂
総入歯洗ろてるときもなむあみだ　紫香
秘書にだけ喋らせておく総入歯　香林
落ぶれて時價で見つもる総入歯　小松園
総入歯云いたい事を云ふて去に　幽王
銭湯で総入歯を洗ふて來　春斎
よく喋る浮氣女の総入歯　三司
総入歯老いてますますお人好し　扇子仙
総入歯はづして寂しう死んでゆき　生々庵
総入歯鉢巻だけはキユッと締め　芦穂
朝顔の前で総入歯のうがいする　栞
総入歯子が死んでから二十年　鮎美
財界へ睨みを利かす総入歯　香林
黒幕に踊る女將の総入歯　同
働くと云ふ氣强さの総入歯　よかろ
総入歯まで洗つてくれる妻いとし　愛論
刺青はどうにもならぬ総入歯　芦穂
たこ梅の常連だつた総入歯　恒明
総入歯当座は枕元えおき　白香
総入歯顔に似合す綺麗すぎ　喜久堂
総入歯知つてて二号甘んじる　葉光
総入歯はづして孫とたわむれる　翠光
チユーインガム貰つたけれど総入歯　博也
総入歯されど一党の首領なり　栞
総入歯笑い忘れた顔になり　鉄兒
新猫なら唄えまつせと総入歯　竹荘
総入歯私もはずしてと孫のだゝ　敬子
食通のもつしれたもの総入歯　葉光
総入歯氣になる音で長談議　栞
総入歯八人目からと話しあい　白香
総入歯算盤だけは確かなり　恒明
ジスイズにしてはおかしい総入歯　灰兒
家業つぐ二度目の大総入歯　路郎

兼題「社長」　友淵貴山選

あゝ云えばよかつた社長室を出る　よかろ
俗物と云はれ社長の廻轉椅子　三司
眠そうな社長へ女秘書皮肉　熾
社長ふと秘書の処女性に迷ふ午后　無人
良い社長ズリ落ちさうなズボン穿く　芦穂
三昧のなる部屋で社長はストを避け　鉄兒
辞める氣の抗議え社長折れてくる　正司
金庫背にごつかと社長座つてい　竹荘
子は專務親は社長で儲けてい　同
「社長です」名刺は腹と共に出し　三晃
アイアムソーリー便所で社長さんと逢い　幽王
女曰く社長なんて甘いもの　眉水
坊ちやんの社長近頃だまされず　志乃布
面会日社長を打診して帰る　いわを
割烹着社長てんぷらあげている　豆秋
月給は遲配社長は出張中　梅里
若社長遊び上手に聞き上手　鮎美
朝掃除社長の席でひと休み　季贊
歴代の社長の額に父もいる　一杉
おつむりの光り具合も社長なり　忠美
俠氣もあつて社長の女好き　梅里
対等の力を社長否定せず　鮎美
おつさんと呼びたいような社長なる　喜久堂
社長宅訪えば小しゃくに犬も吠え　博也
自轉車で若い社長が値切りに來　小松園
社運挽回社長は醉ふて馳け歩き　無人
人使ふ呼吸疲れている社長　よかろ

兼題「作家」　寺井鋭々選

原稿が迫り作家の酒がきれ　正則
作家今日選挙事務所え現はれる　いわを
中味より作家で賣れる古本屋　季贊
一應は魔屈も作家足をへれ　春斎
同じ道同じ作家に今日も会い　三司
何の彼の理屈をつけて作家呑み　幽王
青桐の窓作家は雨に佇ち　三司
原稿が金になるころ病んでいる　竹荘
人氣とは別に作家にある悩み　水堂
酷評の外で作家は儲けてい　翠光
妻の父怒らせている私小説　哲水
吸殻の山に創作渉らず　てるを
角帯が似合ふ探偵作家なり　栞
劇作家に出るよな顔でなし　てるを
カストリ誌一人六役のペンネーム　梅里
縄のれん女流作家は分けてくる　正司
作家とは見えないママの写眞です　白香
行先を云はず作家は旅に出る　いわを
ざくろの実枝もたわゝに作家住む　鮎美
大阪の場末を作家歩きに來　春巣
女流作家へ牛乳瓶の音朝の音　鮎美
ぶつきらほうに着流しのまゝ作家会い　栞

席題「狸寝」　水谷竹荘選

へそくりのありか狸寝知つている　正則
狸寝と根比らべして呑んでいる　豆秋
狸寝の横でコヨリをこさえかけ　紫香
狸寝がほんまになつて乗り過し　喜久堂
狸寝の女の方が焦れている　翠光
狸寝と女將はとうに知つている　栞
狸寝のみんな聞いてるとは知らず　三司
狸寝の奏も細かいいびき振り　生々庵
狸寝へ妻は團扇の手をやめず　貴山
世渡りも上手くて狸寝もうまい　眉水
狸寝を不醉に仲居起しに來　三司
土佐西瓜切れば狸寝蚊をたゝき　哲水
狸寝を知つて母の独り言　水堂
間の抜けた顔で狸寝見すかされ　生々庵
狸寝と知らず二人の仲の好さ　志乃布
狸寝を飛び起させる良い話　よかろ
狸寝入りへ鼻をつまみにくる坊や　春柳
狸寝え妻はまともに話しかけ　哲水
老人に立たれ狸寝する電車　喜久堂
寢返りを打つて狸寝眼をさまし　梅里

小兒科
内科
性病科
安岡醫院
安岡三四郎
道頓堀・日本橋南詰東へ半丁浜側
電話南㊆三一四六

狸寝と知らぬ娘の手を感じ　小松園
狸寝のひそ〳〵話聞いていた　いわを
狸寝の無邪氣そのまゝ寝てしまい　春斉
狸寝と知つてべんちやら云ふている　栞
狸寝をしつて妻はよく働き　博也
狸寝のまゝで女の氣をためし　小松園
狸寝へ誰も起しに來てくれず　喜久堂
狸寝で馴染來るのを待つている　竹荘

席題「あと味」　西尾栞選

横車押してあと味すつとせず　喜久堂
あと味の悪い儲けを酒にする　いわを
後味のよし親切はつくしたし　梅里
附け馬を連れてあと味わるい酒　豆秋
無愛想だがあと味のよいオヤヂ　扇子仙
あと味の悪さ大きく笑つとき　幽王
あど味の悪さ天井え煙の輪　正則
戎橋あと味悪い人と会い　敬子
サッカリンらしいあと味新世界　一杉
あと味は眞直ぐ家路急ぐなり　恒明
あと味の悪いまんまで郷里を発ち　水堂
べんちやらのすぎたあと味とはなりぬ　栞

席題「スナップ」　上田翠光選

スナップへ彼女は向いたまま　夢裡
スナップえ宿の浴衣のかたすぎる　三司
スナップえちよつとポーズをかえて立ち　愛論
スナップの父取先にちとあわて　貴山
滝までの道をスナップついてくる　竹荘
スナップえ一寸足取り変えて見る　牛々庵
スナップにすませば横の人を撮り　三晃
スナップを較べ合ふてる女事務　喜久堂
スナップは人の流れを振り分ける　三晃
スナップへ秘書の機轉が間に合はず　正司
スナップへ私の方が二重なり　正則
スナップの前で子供が立停り　小松園
スナップがき・すぎツパカスまで写し　哲水
許されぬ恋を不覚に写される　水堂
スナップの裾えはつきり夏の風　貴山
スナップに女心を寄り添はせ　芦穂
スナップ屋他人の足を二つ入れ　哲水
スナップへ一さう腕を組みませう　翠光

大阪南支部句會（大阪市）

雑川　創立三週年記念
六月二十日　於　阿倍王子神社　須崎豆秋報

ママまでがひやかす僕のユニホーム　娯句樂
ママ今日も着物を変えて趣味多忙　一香
ひと間だけ洋間の欲しいママの声　蟹面坊
ママパパの踊りを母はおかしがり　唯義
ママひとりまだ純粋の京都弁　万樂
血沈にママは案じた顔を出し　史葉
ステージでお乳が張つて困るママ　豆秋
パパいつもママの煙草へライタ摺る　芦穂
旅客機へママの笑顔を見送る日　文蝶
ママの見栄娘は疲れ切つている　恒明
笠置シズ子にも流れてるママの血が　妄夢
ママだけが知つてる札束の置きところ　淡舟
男ほど稼いで晝はママでいる　水客
足組んでママ細卷の煙りの輪　晴峯
ママあわれ食パン噛り乍ら掃き　貴山
ママの音樂会パパ風呂を焚き　梅里
バレリーナに育てるつもりママの夢　正司
パパママと呼ばせて細い子を育て　小松園
ママも好きパパも好き子供さからわず　夢裡
またしてもママが最初に口を出し　潤年
雛ばさでシートに立たすママであり　一杉
ピンボケの写眞の方にママが居り　史葉
ママの智性がふちなしめがねの奥に映え　春柳
ママの学友令夫人あり女将あり　牛歩
この家もママの設計ですと云い　路郎
幾人も泣かせたざくろの糸切歯　蟹面坊
地下工事髑髏へみんな寄つて來る　牛歩
学説へ髑髏言ひたい事があり　恒明
ざくろ何か名探偵へうつたえる　万樂
日本の土に眠りたい髑髏　豆秋
人魂がざくろの上でたわむれる　春柳
シャンデリヤ髑髏の影の踏むワルツ　貞女
比翼塚髑髏ざくろの差し向ひ　野介
國敗れざくろにあいし潜ろ夫　白柳子
されこうべ俺も死んだらこんな顔　てるを
雨條々髑髏は在りし日を恋いぬ　唯義
発堀の髑髏へ考古学異説　三司
金へンのシャベル髑髏を掘り当てる　潤年
髑髏の眼通して夏の草が伸び　水客
自画像をざくろに似せた夜の自嘲　妄夢
研究のざくろ浮べぬ日を送り　天貧
土着えてざくろは長く長く泣く　天國
阿呆な事ほんまにしますとかるく逃げ　茶三
遠慮なく阿呆が本当の事を言ひ　葉光
阿呆にもなれず悩みの日がつゞき　唯義
放された白痴へ悲しく手を盡し　苑女
飯ごきになれば阿呆も戻つて來　淡舟
阿呆かいな袴モンペにしてしまて　芦穂
苦の種の阿呆に買ふたランドセル　野介
阿呆な子の末が氣になる金を貯め　水堂
貧乏の僻みが阿呆になり切れず　同
苦労性阿呆になつてよく努め　夢裡
閒合せまんさら阿呆とは云はず　娯句樂
母の日に阿呆が少しましになり　落帯
木に登る阿呆の下駄が裏がへり　角嵐
眞相を知つてる阿呆の目が光り　妄夢
もつ誰も阿呆と呼び得ぬ門構へ　失名
出しぬけに阿呆金庫の符を廻し　默平
お茶漬で済まして今日は里帰り　明欣
ぶゝ漬になつて今頃唄うたう　万樂
弁当箱角へ茶漬の口が行き　唯義
待たされる部屋へ茶漬の音となり　妄夢
本心を茶漬けになつてから話し　鮎美
塩こぶを浮かす茶漬の茶が足らず　角嵐
茶漬サラ〳〵昨夜の酒が殘り氣味　恒明
見舞客茶漬のうまさなど話し　芦穂
茶漬でも食べて帰れと引き止めず　梅里
お茶漬でよいがな他人と違ふがな　貴山
おとなしく茶漬を食べて去んでくれ　一杉
茶漬食うだけに起きてゝくれる妻　默平
ずぶ濡れになつてお迎へ叱られる　落帯
ずぶ濡れの帰り仕度がよく釣れて　てるを
ずぶ濡れのまゝで署長に握手され　小松園
ずぶ濡れの度胸ゆつくり歩るいてる　豆秋
ずぶ濡れに腹立しくも虹が立ち　芦穂
よう帰つて來たなあとずぶぬれいたわられ　春柳
ずぶ濡れにされる覚悟でボート漕ぎ　英美子
ずぶ濡れのシャツ干してから勤めに出　文蝶
ずぶ濡れで集金にいて断わられ　豆秋
ずぶ濡れの橋筋南へみんな散り　天國
ずぶ濡れの狂女と土堤ですれちがい　正司
ずぶ濡れの妻も帰つた共稼ぎ　春峰
秋の陽に二科の錯覚まだのこり　正司
失恋は又錯覚を繰返し　紅村
友二人この錯覚にさそいこみ　一香
錯覚を妻さからはず聞いている　恒明
大いなる錯覚自己を信じ切り　野介
焼跡に佇ち錯覚の陽を仰ぐ　芦穂
美くしい錯覚のまゝ目をつむり　葉光
雀ちゆん〳〵その錯覚は朝に生き　鮎美
少年の錯覚山の色が出ず　角嵐
化の皮はげて便所へツイと立ち　いわを
化の皮はげて一座の興となり　悦樂
マッチから積る浮氣の足がつき　水堂
化の皮はがれたらしい電話口　史葉
化の皮面と向つて言う日なり　万樂
折角の職へ前科がバレかゝり　默平
化の皮おめこぼしある離れにゐ　鮎美
訳言の余地なし落ちた花名刺　默平

東京そばと
灘一とすじ
アベノ橋地下映画食道街
梅里の店
大萬
★大万川柳（第五回）を募る
兼題「献立」　路郎先生選
締切・九月十五日　句數五句以內
発表・九月廿一日（店内に掲示）
御投句は大万宛・どなたでも

化の皮はげて主客が笑ひ合ひ　没食子
清らかな瞳が恐い化けの皮　蟹面坊
妻無言バレたと思ふ化けの皮　夢裡
火をつけた方がどうやら勝将棋　茶三
負け将棋坐りなほして見たもの・　恒明
こう角と行けばよかつた戰后観　一香
逃げぬいて開き王手に投げた駒　默平
社長さん待つたなしですよと王手　豆秋
片馬をおろしてもらふ世辞となり　妄夢
負けかけた将棋ラジオをぶつり切る　淡舟
両馬を下ろしてもろて汗をかき　小松園
持駒を靜かにきいて飛車が成り　角嵐
王手飛車取り蚊が喰ふどころかい　天貧
一手詰さておもむろに喫ふ煙草　愛論
確実に負けた将棋へ未だねばり　没食子
素人の将棋と見えぬ歩を使ひ　同
いつの間か二歩になつて、勝将棋　貴山
見物の溜息が出る将棋盤　万樂
どつちみち勝てぬ将棋の金を取り　白柳子
詰将棋蚊帳がつれんやおまへんか　恒明
移り氣を将棋の駒に笑われる　水客
詰将棋きたない指が詰て去に　天國
今日誰も見てゐてくれぬ王手飛車　芦穂

雑川 下關支部句會（下関市）

七月八日　於 下関駅会議室
石川 侃流報

高笑いするみす内は裸なり　九呂平
妻四十したしむように灸へ脱ぎ　藤市
子も裸親も裸で野良仕事　柳坊
本で見た灸受へ不安な墨をつけ　素人
看板の家傳の灸は大きくし　十郎
陣笠のまゝで一生無口で居　紫蓮
急病へ医者はゆかたのまゝでかけ　素人
大関の背中に並ぶ灸の痕　良坊
素裸であそべと母の困りよう　ほなみ
湯加減を聞いて裸で入つて来　司楼
ワンダフル何々教祖何御殿　不水
ペニシリンもマイシンも捨て、灸に落ち　侃流
一割の利子でへそくりみな出させ　米三
効能がチト多すぎる灸袋　牛休門
からくりと知つたは後の祭なり　妻楊子
言わせては不利だと金をかませとき　木陽子
税務署のような佐倉ののぞき唱　かうたる

雑川 出雲支部句會（出雲市）

食糧分会
六月十二日　石橋 斉兆報

新廳舎五月の鯉と共に建ち　秋月
落成に次ぐ新たなる願いごと　斉兆
田植唄娘は流行歌ですませ　明水
新婚の笠深々と田を植える　代仕男

雑川 岡山支部句會（岡山市）

六月十六日　於 岡山駅日本間
藤本 潮年報

女房の怨み友達みなかぶり　青蟬
悪友を引合に出す二日酔　三林坊
赤帽が妙なところを通り抜け　九坡
なめたのかとんぼが肩に来てとまり　格一
天満屋へ便所を一寸借りに行き　四案
青赤青赤交通巡査疲れきり　九坡
改札は一緒に出たが青と赤　格一
團体が半分通つて赤になり　風柳
ソプラノへバスがまじつて新世帯　茶々
ソプラノで怒りアルトで愚痴を言ひ　十九平
ソプラノへ押され氣味なる父のバス　四案
妻いつかラジオで起す手を覚え　案山子
今晩のおかずラジオの智恵も借り　茶々
ガーガーピーピーきちんと聴取料とられ　焦児
アナウンサー日本中へ喉ばらい　青蟬
ラジオ屋もラジオ聞いてる午下り　貞三
農繁期ラジオが先に寝てしまひ　美能留
赤帽を目で呼んでいる皮かばん　茶々
二等車の位置を赤帽心得る　潮年
天満屋は上へ上つて下りただけ　格一
待ち人が来て天満屋に用がなし　九坡
目印を天満屋にした地図を書き　九六
天満屋を見たのが村で自慢をし　草骨

雑川 大牟田支部句會（大牟田市）

六月　於 三染宿直室
富田 一葉報

一思ひ誠を覚悟で云つちまい　正美
公僕が一寸手出したつまみ食い　十時
犯罪の裏に公僕糸をひき　抱逸
公僕の噂にマイクが苦笑する　五酔
街録に公僕無茶に叩かれる　川端
臆測もされて公僕楽でない　正則
公僕の挨拶羽織袴で来　千恵子
パパですよと遺児に教へて嫁がぬ氣　迷夢
嫁かぬ氣はあの人知らぬ前のこと　智恵子
默否権使つて嫁かぬ氣を示し　句志夫
嫁がずにボーイフレンド五六人　川端
病床の母へ嫁がぬ氣で稼ぎ　十時
失恋へもう嫁かぬ氣の野良仕事　修
嫁かぬ氣の胸ホトホトと叩くひと　笑呂九
嫁かぬ氣の人には言へぬスキャンダル　青粒子
温泉郷別な名所に名を連れ　渓泉
弁解をしてから誤解されており　天一坊
誤解した夫の無口氣にかゝり　亀水
給料日せめて子だけへ夏姿　正則
来月の予算が違ふ給料日　抱逸
給料日ねぎろう妻の薄化粧　翠平
給料日エタイの知れぬ女来る　抱逸
給料日月賦泌々嫌になり　抱一

雑川 小郡支部句会（山口縣）

七月六日　於 小郡鉄道倶樂部
長野 井蛙報

雨宿り壁新聞を二度も読み　柳虹
梅雨晴れて物干竿のありつたけ　一挙
雨やんだしをに勝碁の石を置き　井蛙
折詰を見ろと幹事は大きく出　枯泉

阪田謄写版
大阪市北区芝田町五二
株式会社 阪田商会
電話 福島 五九九一番
五六三一——四番

時間表めくつて旅のプラン立て　風來坊
電報へいそいでめくる時間表　一路
時間表覚えたころにまた変り　のむら
地図も出し駅も数えて時間表　遊曳
宿賃を夜汽車で浮かす時間表　井蛙

雑川 篠山支部句會（兵庫縣）

納涼川柳会
七月十四日　於 関西電力厚生寮
小西 無鬼報

木蔭までもう一息と母背負ひ　初夫
ホームラン木蔭へ一寸帽子ふり　ひかる
木蔭にも精一ぱいの実を結び　指月
街路樹の蔭を求めて電車待ち　同
もうお別れよ黙つて樹を撫でてゐる　無聖
ノーハット木蔭軒蔭よつて行き　同
闘病の椅子を木蔭に運ぶ母　無鬼
ナイロンビニロン次は何ロン生れるか　和子
ナイロンの雨衣の下は菜葉服　初夫
町裏の雨ナイロンの肩を抱き　ひかる
ナイロンの風呂敷店のはなに出し　菁花
ナイロンでパーマ包んだ俄雨　尋四
たたき屋の冗談足を止めさされ　梅香
恋すればこそ冗談と受取れず　ひかる
冗談の出る日課長の盲目判　菁花
冗談を云へば娘の手がピシャリ　無聖
冗談がすぎてオッチョコチョイにされ　無鬼

買はぬ手がそっと服地にふれて行き　梅香

百貨店出てからタタキで服地買ひ汲流

純毛の服地値段を問ふただけ　同

飲み代で買へると妻は生地を見せ　ひかる

長男へ姉の服地を染めてやり　指月

手が出せぬ服地一番目に止り　句士

スカートの端ぎれ子供の服にとり　菁花

純毛ですよとマッチで燃やして見　尋四

川雑　**弓削支部句會**（岡山縣）

七月七日　於公民館

福島　鉄兒報

秘書志願二号の冥悟出來て居り　巷雨

鍋で水汲むも覚悟の共稼ぎ　不老

妻のヒス覚悟でかえる午前二時　桃々

覚悟してほしいと医者は云うて立ち　和子

本妻は捨てる覚悟の二号邸　至孝

もう居らぬ覚悟で女房荷をまとめ　鉄兒

窓人が見てゐる派手に辷り込み　弓削平

辷り込み暫し砂塵の中にあり　笑泉

スタンドを総立にした辷り込み　十九平

招かれて見せつけられる新世帯　呑氣坊

招待へライバルが居てうちさびや　百郎

招待の席へ遅参を詫びて就き　七面山

招待へよんどころない額を出し　不老

招待券決局高いものにつき　十九平

招待状勤めは辛いものと知り　鉄兒

好策の膳立をして招待し　百郎

瓜二つ姉と妹呼び違へ　朗笑

やあ君と肩叩かれた瓜二つ　七面山

瓜二つ目じりのほくろだけ違い　畝女

人だから私服ゆつくり様子を見　不老

ボンサンが財布握つた夜店の灯　弓削平

盗電の百燭光で宴を張り　笑泉

盗電で切れたヒューズは知らず　鉄兒

買い立てのラジオ届けるひまもなし　桃々

盗電の言訳女房にまかせとき　一貫

盗電と知れるすき間の明りなり　凡太郎

盗電は官廳先に篭を垂れ　呑氣坊

川雑　**備前支部句會**（岡山縣）

六月九日　於浜田久米雄居

大森　苑女報

検温器三十九度の手がふるえ　正州

もう午後の検温らしい靴の音　八千代

検温器はさみ続きの本を読み　遥平

検温へ甘えてみたい氣にもなり　玲花

みうちへは知らせておけと検温器　娯句樂

検温器氣づかう母へ嘘を云い　東岸子

検温器峠は越したらしい顔　苑女

男手を賞めて野菜を貰つて来　同

男手がほしい〳〵と未亡人　淨美

男手の炊事茶碗を積み重ね　正州

答弁の彌次へワンマン振り向かず　桂月

ピッチャーの彌次まえに聞く手がきえり　娯句樂

金の事言うなと男髪てしまい　東岸子

金の要る話背中で聞いておき　久米雄

川雑　**姫路支部句會**（姫路市）

萩原二葉氏送別会

七月八日　於木下　和水居

夷　一笑報

噴水へ二昔前思ひ出し　一郎

夏帶へ噴水さらに涼味そへ　和水

出張の旅噴水へ来てさびり　一笑

がらくたもすつくりんで行く移轉　同

移轉する住居は窓のかくれ家よ　二葉

市民税引越し先をきいて来る　一笑

カバンだけはご肩身はなさずもつてのり　孤笑

ほうじ茶の匂ひも夏の二階町　一笑

ぬぎすてて冷たいお茶をくれと云う　同

徹夜する机の上の茶の道具　孤笑

魚町を抜けたところで生ビール　一笑

健康を先ず祝しあう大ジョッキ　一郎

ビール一杯今日の疲れも泡となり　和水

川雑　**岡山縣廳支部句會**（岡山市）

六月二日　於廳内世話課寮

服部十九平報

握り箸へグリンピースは逃げ廻り　中山子

見合の日箸もつ手元まで見られ　夢沙子

一人者箸を火箸にしてしまい　風柳

面倒になつてフォークを箸に変へ　忠美

杉箸の香もよし酒の酔い心地　まさを

余漬尚醒めず火箸をぐつと刺し　十九平

箸一本流して姑にわびを云い　案山子

子沢山手に持つ箸の長短か　まさを

初入選子の作品に背伸びする　翻骨

留守番の子は電話器に背を延し　筍

せいくらべ一人は背伸びを見張る役　案山子

背延びする猫が嫁には羨まれ　びか一

映画館彼女背伸びの手をあづけ　七面山

赤ちゃんの背伸びこれから泣くつもり　格一

湯上りはちゃれる小犬を下駄で受け　鈍骨

湯上りに身丈の合わぬ寝浴衣　風柳

腕自慢負けた話は伏せておき　青蛾

法螺吹きの自慢二分の一にされ　夢沙子

感覚と巷の犬と比較され　七面山

戰後派のセンスに解ぜぬ島辺山　十九平

川雑　**詑間支部句會**（香川縣）

日　於永康病院内

大西　迷窓報

青空へ処女のまなざし汚れなく　國定子

冗談に寄つても処女は身構へる　迷窓

尊敬はしてゐますが処女は逃げ　太平

私生活聞いて尊敬みなくだけ　敏子

小荷物の無事を願うて締める紐　旋子

日の丸句會（鳥取市）

六月十八日　於会社事務所

河村日潮子報

七ツ道具ほど持つて夜釣のものゝ〳〵し　日潮子

毎日は釣れぬ昨日の鯉を言ひ　同

今掃いた庭鶏はかきちらし　芳道

世知辛き鶏からも稅を取り　遊星

安かつたヒヨコどうやら雄ばかり　三歩

故郷よし鶏が居り牛が居り　日潮子

鶏は稅金までの枠で飼い　露風

痛ましきかなおふくろの腰曲り　たかし

足まめに手まめに母のいゝ嫁け　至高

働いて蓄めて母さん呼ぶつもり　芳道

PTA娘のやうな母が居り　露風

母親へれだる口調は又遣い　紅粒

親方の鉄にまけぬ弟子が出來　貴美女

青空川柳句會

六月九日　於久松山頂上

やうやくに稅吏帰して汗をふき　芳道

拭いてあげまうと好きな人の汗　日潮子

草原に一本ぽつんと櫻の木　なぎさ

炭坑節もよし草原の一ところ　日潮子

頂上から見える我が家は蟻のやう　梶村

やつと来た頂上空と続いてる　三歩

静動

▼本社句会は八月四日午後六時半から大宗文化会館三階で開催 路郎 主幹は連日連夜のフントウで当夜は歯痛のため柳話、を中止され選句だけされた。▼南区医師会文化部川柳会（大阪市）は八月十九日午後五時から高野線天見温泉南天荘で開催▼川柳一路会句会（大阪市）は八月九日午後五時半から高島屋飯田株式会社で開催▼大阪逓信病院川柳会は八月十八日午後二時から五階講堂で開催▼竹荘銀婚式句会（大阪市）は八月廿一日午後六時竹荘居で開催▼南海電鉄川柳部句会は八月廿四日午後五時半から南海高等学校で開催。以上何れも路郎主幹出席▼川雑下関支部句会は八月十二日十三時長門一ノ宮福王寺で開催▼川雑京都支部句会は八月十六日午後六時から正定院で開催本社から芦穂氏出席▼交通局川柳会（大阪市）は八月十日午後一時から天王寺仮泊所で開催▼川雑岡山支部納涼句会は十八日午後一時から澗年居で開催▼川雑備前支部句会は七月十四日娯句楽居で開催▼ラヂオ祭に因む納涼川柳大会が新京阪新聞社主催で七月廿八日午後六時から吹田市立保健所新館講堂で開催された▼川雑備前支部納涼句会は八月十一日久米雄居で開催▼池田可宵氏（長崎市）は八月十一日夜、新聞社とペンクラブ共催の夏期講座の川柳を担当された▼川柳残燈会句会（名古屋市）は八月十日に開催された▼汐風川柳社納涼句会（今治市）は八月五日茶道会館で開催▼穂積重遠博士が七月廿九日午後十一時十五分心臓変性症のため東大病院で永眠された行年六十八歳、博士は厳父陳重博士と共に古句を研究されていた。謹んで悼む▼河楊梵鐘氏（貝塚市）からの通信によれば八月は故千原庸司一周年に相当するが暑氣が激しいので一ケ月延期するとのこと▲野村味平氏（石川縣）は六月から大聖寺町の信用組合に勤務されていると▼大島濤明氏（熊本市）は「キャンプ村その川下は壕に住み」の句信を寄せられた▼坂下也奈貴氏（東京都）は八月十日に福井、石川、富山三縣へ温泉視察のため出張、月末帰京の由▼清水汪夕氏は岐阜市加納本町九丁目え移られた▼山本正氏は岡山市上伊福絵図町三七三ノ五近常方へ移轉▼西川青美氏（兵庫縣）は社の休暇をとつて揖保郡東栗栖村千本上の山へ一週間暑を避けられたと。

不朽洞会から

▼高田抱逸氏（大牟田）は「祇園祭オールアップの娘にみとれ」の句信を寄せられた▼森下愛論氏（布施市）は八二本社句会に於て、不朽洞優勝カップを把持された▼浜田久米雄、大森風来子、藤本澗年の三氏は七月廿一にKKから川柳コントの放送をされた▼福島鉄兒氏（岡山縣）から七月廿九日丸山弓削平氏と共に、川雑岡山支部に藤本澗年氏を訪い柳談に花を咲かせたとのおたよりに接した、なほ同氏は七月廿二日に津山市の小島祝平氏を訪問されたと▲夷一笑氏（姫路市）は七月廿四日に川雑千日前連絡所に來訪されたとのことであるが生憎火曜日だつた▼藤本茶々氏（岡山市）は夫君澗年氏が六月十七日から発熱、四十余日の看護で作句も手につかなかつたとのこと、全く心痛されたことと恐察申上げる（なほ澗年氏は快癒八月から出勤されている由）▼福田山雨楼氏（横浜市）は闘病に専念自重して毎日床の上でひる寝をされている由▼大森風来子氏（岡山縣）は富士登山頂から通信を寄せられた日は不明▼田中辰二熊大教授（熊本市）は「川柳研究」のプリントを刊行し初心者指導に力を盡していられる▼築山快夢起氏（ホノルル、市）の通信によると、同地の閨秀作家さとみ女は最近メキメキ上達、句会へは家事の都合で出席されないが、句は毎会入選、將来をショクモクしているとのこと、快夢起氏と同じく東京出身だそうで、昨年だが古賀、霧島渡布の際、ホノルル、市の邦人経営百貨店フエーアで一手販賣の洋服ハモントンパーク宣傳用の歌謡募集の折一

川柳不朽洞會

指導 麻生路郎

賛助 池沢楽居　長谷川一徹　笠原路生　長野晴浜　藤村作　淺田一　末弘嚴太郎　中田守雄　白川朋吉　中村祐吉　高安六郎　藤村雅光　田中辰二

洞友 島山一歩　沖野岩三郎　亀井晟修　田村孝之介　山本雨迷　安川久留美　山路閑古　前田伍健　柴谷宰二郎　蛭子省二　麻生葭乃　橋本緑雨　高鷲亜鈍　沢田四郎作

不朽洞會員

—特別會員— 中島生々庵　奥村丹路　武部香林　浪玲之介　上田翠光　木村孤浪

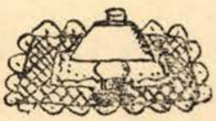
—維持會員— 福田山雨楼　戸倉普天　寺井鋭々　石井白面人　戸田古方　前山北海　古川魔花麗　内藤草一郎　三輪曉翠　水谷鮎美　村松夢裡　大坂形水　藤岡至藝瑠　井上湧三　北林松代　宮田不二　西垣錦風　川村好郎　浜田久米雄　築山快夢起　西尾栞　永田里十九　高田抱逸　村田流水　小田沙兆　市岡曉舟　三鴨美笑　林盆丘　松野えいを

—正會員— 市場沒食子　吉田水車　大西八歩　須崎豆秋　石曾根民郎　正本水客　黒川紫香　竹内潮花　北川春巣　布施筑川　尾崎方正　櫻川不水　好崎申仙　菊沢小松園　逸見灯竿　清水白柳子　鈴木九坡　夷一笑　小川恒明　德永雅美　大森風来子　岡島嶺泉　木下幽玉　福田妄夢　中島鉄洲　新川博也　尼緑之助　水谷竹荘　小橋隆如　弘津柳慶　吉田圭井堂　小坂慈雨来　杉谷湖山　増田耕民　國弘半休門　佐野卜古　小沢史葉　小西無鬼　大鶴喜由　吉田斜水　山口秋花　野本呑水　土井文蝶

等に当選された才媛だとのこと▼池沢栄居氏はさきに刊行された「善意経」が姫路市伊傳居南之町日の神教團本部で実を結び、教祖に祭り上げられ、当分同本部に滞在し教義を執筆中とのこと▼種瓜平氏（大阪府）は「近鉄ニュース」八月号に「生駒のぼれば」の文と挿画を寄稿された▼蛭子省二氏（愛媛縣）は内子短子門の人たちと七月廿一日夜、一鉄居で内子出身の高橋通産大臣へ敬祝句会を催し麦酒で乾杯、句は大臣へ贈呈されたと▼戸倉普天氏（兵庫縣）は「民間傳承」の八月号に「丹波のコト箸」を執筆された▼山根白星氏（高岡市）は永らく青森縣に出張されていたが八月から札幌市南大通西十三丁目九番地橋本産業株式会社に轉勤された▼麻生路郎師の胸像の原型がモニユーマン協会員白石正義氏の手によつて完成したので、八月十一日夜、不朽洞に中島生々塵理事長、須崎豆秋、水谷鮎美、西尾栞の諸氏が下検分で集つた▲大西迷窓氏（香川縣）は七月二十二日高松で開催された山陽新聞四國川柳会に出席された▼直原七面山氏（岡山縣）は七月末から散歩が出來るようになられ八月中旬には出勤されると「床上げの窓を仰げば日本晴」の句を寄せられた▼戸倉普天（兵庫縣）は八月二日日和山竹野浜え海水浴に出かけられ城崎から「客種も変つたナアと湯槽から」の句を寄せられた。なほ八月二十日過ぎ令孫を送り旁々上京される由▼伊藤迷宮氏は家事の都合により七月限り退会された。

新会員紹介（八月）

中村　ただみ氏（玉野市）正　満年氏推薦
山本　葉光氏（大阪市）正　豆秋氏推薦



不朽洞の喫煙室

云ひたい事を云うぺージー
（到着順）

御案内

須崎豆秋

「めし」の作者林芙美子が、こんな所に住みたいとまで云われたジヤンジヤン横町から、旭町ジヤングルへかけては実に赤裸々な人間絵巻が見られて愉快です。私はこの界隈に住んでいるので、何時でも御案内しますから御見学にお越し下さい。

サンマータイム釣り

水谷鮎美

このごろは毎日退勤後、武庫川尻へ釣りに出かけるのです。二時間は充分樂しめます。廣々とした河口は碧い海、ぐぐつと引いた瞬間の手ごたえは、快感涼風は夕ぐれに啼く千鳥に和してえゝ眺め、潮の満ちるのを見ながら持参のウヰスキー数杯、そして陶然と帰路につくのです。十六日間の收かく鯊二五六尾四貫六百匁御案内申しますいちどいらつしやいませ。

○

爽一笑

すきなもの　年よりと子供
きらひなもの　学校ボスとこれにへつらふ人

ひや水ちかし

水谷鮎美

ビールいつぽんもちびりちびりと飲まないと近頃は酔わない。初老と知るますますほろにがい人生と成りつゝある。某月某日。

○

麻生葭乃

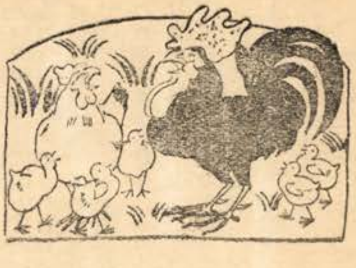
鳥は唄ひ、蛙は鳴く。然し決して笑はないのである。笑ひは人間にのみゆるされた天賦の筋肉運動である。笑ひの文學は最高の位置を占めるものであると私は思ふ。

耳鼻咽喉科　牟田病院
院長　牟田哲三郎（一哲）
大阪市南区長堀橋交叉点西・電話船場五〇〇〇番

小林文月　大西野介　亀山晴峯　山根白星　種　瓜平　渡辺孫拙　福島正則　宮岡淡舟　山野星登　飯降白香　中内翠芳　西辻竹青　長野井蛙　林野甦光　竹田芦穂　阿万万滴　間島青丹子　上田春柳　友淵貴山　森下愛論　大西柳堂　太田良子　岸　南柳　松井可笑　松江梅里　丸山弓削平　直原七面山　黒田笑泉　上林粗影　狩野燕子　石岡正司　西森花村　河村日渉子　田代尋四　家沢齊花

藤本満年　西口如川　姫田夕鐘　福島鉄兒　直原湖月　黒田久米女　藤本茶々　塩浜一路　谷内一草　福本闘骨　松崎五馬　布村南扇子　榎南夏六　小畠無壘　田中遊星　西いわを　高山朗笑　杉山一貫　家本富至　横部牛歩　服部十九平　大森娯句樂　長谷川三司　田辺由布　荒木哲水　山中志乃布　桑原表情　上坂　茂　成瀬月仙　若林草石　足立春雄　中村五酔　有働芳仙　大西迷窓　延永忠美

黄瀬美秋　米田孤舟　地供山風楼　淡畑胡蝶　阿形一杉　坂田良坊　石川侃流　大森苑女　安岡珊枝郎　長谷川迷路　南　捨舟　黒木彈正　牟田一哲　河村瑞川　木村無名林　田中鳥耕　藤原虚水　益永貞女　大倉四案　山田季賛　山田鳥莊　水本無人　水田草骨　中村ただみ　山本葉光

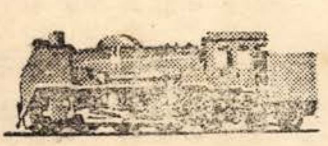


編輯局にて

▼毎号好評なので、暑さも消し飛んでしまう。編輯局には「句三昧に暑さなし」と云う短冊がブラ下つている。その前では暑いとも云えない。素ッぱだかで、眼を落ちくぼませてペンを走らしている。牛乳にいちぢく一ケ、それで露めしをすます時もある。食慾減退、体重減少又やむを得ない訳である。斯くして成る第二九二号、切に〳〵御愛読を祈る。▼表紙（秋の風）は例によつて由比種三郎画伯を煩わした。▼福田山雨楼氏は闘病生活の中から「講和と川柳」を寄せられた。▼石田喜宝亭氏は「イングリッシュ・ヴアーシヨン・オブ・ザ・ンリユウ」を寄せられた。従来発表された英訳川柳より一歩ぬきんでていることをうれしく思う。氏が海外各地に永住し、殊に英語に堪能なのと、川柳の実作家である点がこの結果を見たものだと思う。▼川村好郎氏が令弟松江梅里氏同伴の旅行記「日光見物」を寄せられた。ザックバランに書かれてあるのが川柳人の旅行記らしくていゝ▼市場没食子氏は「川柳から見た産児制限と避妊薬」を寄せられた。薬剤士らしいテーマであることにほゝえまされる▼小畑自由朗氏の「川柳漫釈」は一沫の涼味を送る好読物▼富士野鞍馬氏の「武蔵坊弁慶」の続稿は氏の努力の贈物であることをうなづかせるに充分であろう。▼丸山弓削平氏の「中学一年の川柳」は句のよしあしは別として氏が川柳普及に盡瘁されている一端をうかがい知ることが出来る▼安川久流美氏の「忘れればこそ」は北國の老川柳人のメンメンたる筆のしづくである▼拙稿「新川柳評釈百句」は新川柳の佳吟を拾つて社会人への贈物である。川柳普及のための読物はまだ〳〵必要だと思うので悪筆を弄している訳である。　採録の句主の諒恕を願う次第である▼戸田古方氏の詠史川柳「にっぽん」は筆者の都合で今月だけ休ませていただくとのこと。暑中休暇も学校の先生らしくていゝ▼私の「窓口談義」は大変評判がよかつた。今月は、もつと私的な方面に筆を走らして見た▼又文化祭が近づいて来た。世話役がそろ〳〵動いてくれているようであるが、大いに馬力をかけてもらいたい。折角の催しをやるのに、グヅついて十一月三日から遙にすぎてからやるのでは鰻の香気がないのと等しい。変なものをデッチあげるのであれば、むしろ各社が競演をしてもいゝと思う。▼暑中見舞のおはがきを沢山いただいたが、例によつて一々お返事が出来なかつた。誌上の御挨拶で御勘弁が願いたい。こちらはお陰様でみんな元気ハッラツだと云いたいが、小生は連日連夜のペン労働で、歯がいたみ四日ほどヘコ垂れた。しかし句会も休まないし、仕事も続けている。編輯主任のPOEも、かなり痩せほそつて、胸と背中がひッつくやうだと云いながらもガン張つてくれている。（路郎）

自轉車は
シマノの
3.3.3号

最短時間で結ぶ
大阪―名古屋
3時間
特急
毎日3往復
座席指定制
特急料金 ¥100
上本町發
7.40 12.40 16.40
名古屋發
8.00 13.00 17.00
近畿日本鉄道



C58型
マツサカパークの汽車は東海道線急行列車の機関車と同型です
一日あそべる
マツサカパー
松坂屋 屋上

Made in Occupied Japan

募集

課題吟募集

映画（十句）須崎豆秋選
社宅（十句）國弘半休門選
（九月廿五日締切）
一泊（十句）菊沢小松園選
女将（十句）古川麗花選
（十月廿五日締切）

毎号募集

近作柳樽（雑詠廿句）麻生路郎選
川柳塔（雑詠）麻生路郎選
文章（評論・研究・感想其他）
（毎月廿五日締切）

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。
▼『課題吟』は何人でも投句が出来る。
▼『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。

B列5号　毎月一回一日発行
川柳雑誌　第六巻第九号
一冊　金三〇円
半ケ年概算　金一九八円 送料（三円）
一ケ年概算　金三九六円
（禁轉載）
昭和廿六年八月廿五日印刷
昭和廿六年九月一日発行
大阪市住吉局區内万代西五丁目二五番地
編輯兼発行印刷人　麻生幸二郎
大阪市住吉局區内万代西五丁目二五番地
発行所　川柳雑誌社
振替口座 大阪 七五〇五〇